

趣味の遺伝

夏目漱石

青空文庫

陽氣のせいきちがいで神も氣違いになる。「人を屠ほふりて餓うえたる犬を救え」と雲の裡うちより叫ぶ声こゑが、逆さかしまに日本海を撼うごかして満洲の果まで響き渡つた時、日人と露人ははつと応こたえて百里に余る一大屠と場じょうを朔さく北ほくの野やに開いた。すると渺びよう々びようたる平原の尽くる下より、眼にあまる狗いぬの群むれが、腥なまぐさき風を横に截きり縦に裂いて、四つ足の銃丸を一度に打ち出したように飛んで来た。狂える神が小躍おどりして「血を啜すすれ」と云うを合あ図ずに、ぺらぺらと吐ほくおの舌おは暗くき大地を照らして咽喉のどを越す血潮の湧わき返る音が聞えた。今度

は黒雲の端はじを踏み鳴らして「肉を食くらえ」と神が号さけぶと「肉を食え！ 肉を食え！」と犬共も一度に咆ほえ立てる。やがてめりめりと腕を食い切る、深い口をあけて耳の根まで胴にかぶりつく。一つの脛すねを啣くわえて左右から引き合う。ようやくの事肉は大半平げたと思ふと、また霧べきべき々たる雲を貫つらぬいて恐しい神の声がした。「肉の後には骨をしゃぶれ」と云う。すわこそ骨だ。犬の齒は肉よりも骨を嚙かむに適している。狂う神の作つた犬には狂つた道具が具そなわっている。今日の振舞を予期して工夫してくれた齒じや。鳴らせ鳴らせと牙きばを鳴らして骨にかかる。ある者は搥くじいて髓ずいを吸い、ある者は砕いて地に塗まみる。齒の立たぬ者は横にこいて牙きばを磨とぐ。

怖こわい事だと例の通り空想に耽ふけりながらいつしか新橋へ来た。見

ると停車場前の広場はいっぱいの人で凱旋門がいせんもんを通して二間ばかりの路を開いたまま、左右には割り込む事も出来ないほど行列している。何だろう？

行列の中には怪あやし気げな絹シルク帽ハットを阿弥陀あみだに被かぶつて、耳の御蔭で目隠しの難を喰くい止とめているものもある。仙台平せんだいひらを窮屈きうくつそうに穿はいて七子ななこの紋付を人の着物のようにいじろじろ眺ながめているのもある。フロック・コートは承知したがズツクの白い運動靴をはいて同じく白の手袋をちよつと見たまえと云わぬばかりに振り廻しているのは奇観だ。そうして二十人に一本ずつくらいの割合で手頃な旗を押し立てている。大抵は紫むらさきに字を白く染め抜いたものだが、中には白地に黒々と達筆ふるを振ったのも見える。この旗さえ見たら

この群集の意味も大概たいがい分るだろうと思つて一番近いのを注意して読むと木村六之助君の凱旋がいせんを祝す連雀町れんじやくちよう有志者とあつた。ははあ歓迎だと始めて気がついて見ると、先刻さつきの異装紳士も何となく立派に見えるような気がする。のみならず戦争を狂神のせいのように考えたり、軍人を犬に食われに戦地へ行くように想像したのが急に気の毒になつて来た。実は待ち合す人があつて停車場まで行くのであるが、停車場へ達するには是非共この群集を左右に見て誰も通らない真中をただ一人歩かなくつてはならん。よもやこの人々が余の詩想を洞見どうけんしはしまいが、たださえ人の注視をわれ一人に集めて往来を練ねつて行くのはきまりが悪わるいのに、犬に喰い残された者の家族と聞いたら定めし怒おこる事であろう

と思うと、一層調子が狂うところを何でもない顔をして、急ぎ足に駐車場の石段の上まで漕ぎつけたのは少し苦しかった。

場内へ這入って見るとここも歓迎の諸君で容易に思う所へ行けぬ。ようやくの事一等の待合へ来て見ると約束をした人は未だ来ておらぬらしい。暖炉の横に赤い帽子を被った士官が何かしきりに話しながら折々佩剣はいけんをがちやつかせている。その傍そばに絹シルクハット帽が二つ並んで、その一つには葉巻の煙けむりが輪になつてたなびいている。向うの隅に白襟しろえりの細君ひんが品のよい五十恰好かっこうの婦人と、傍わきの人には聞えぬほどな低い声で何事か耳語みみごいている。ところへ唐とうざん棧の羽織を着て烏打帽を斜いめに戴いたいた男が来て、入場券は貰えませんが改札場の中はもういっぱいですと注進する。大おおお

方^た出^で入^いりの者であろう。室の中央に備え付けたテーブルの周囲には待^まち草^く臥^たびの連中が寄つてたかつて新聞や雑誌をひねくつてゐる。真面目に読んでもるものは極^きめ^わて少ないのだから、ひねくつてゐると云うのが適當だろう。

約束をした人はなかなか来^こん。少々退屈になつたから、少し外へ出て見ようかと室の戸口をまたぐ途端に、背^せ広^びろを着^ひた髯^げのある男が擦^すれ違^{ちが}いながら「もう直^じきです二時四十五分ですから」と云つた。時計を見ると二時三十分だ、もう十五分すれば凱^{がい}旋^{せん}の将士が見られる。こんな機会は容易にない、ついでだからと云つては失礼かも知れんが實際余のように図書館以外の空気をあまり吸つた事のない人間はわざわざ歓迎のために新橋までくる折もあるま

い、ちようど幸さいだ見みて行いこうと了り見けんを定めた。

室を出て見ると場内もまた往來のように行列を作つて、中にはわざわざ見物に來た西洋人も交つている。西洋人ですらくるくらいなら帝国臣民たる吾輩わがはいは無論歡迎しなくてはならん、万歳の一つくらいは義務にも申して行こうとようやくの事で行列の中へ割り込んだ。

「あなたも御親戚を御迎おもいでいに御出おいでになつたので……」

「ええ。どうも気が急せくものですから、つい昼飯を食わずに來て、……もう二時間半ばかり待ちます」と腹は減つてもなかなか元氣である。ところへ三十前後の婦人が來て

「凱旋の兵士はみんな、ここを通りましようか」と心配そうに聞

く。大切の人を見はぐつては一大事ですと云わぬばかりの決心を示している。腹の減った男はすぐ引き受けて

「ええ、みんな通るんです、一人残らず通るんだから、二時間でも三時間でもここにさえ立っていれば間違いつこありません」と答えたのはなかなか自信家と見える。しかし昼飯も食わずに待っているとは云わなかつた。

汽車の笛ふえの音を形容して喘ぜんそく息病やみの鯨くじらのようだと云つた仏蘭フラ西ンスの小説家があるが、なるほど旨うまい言葉だと思ふ間もなく、長蛇のごとく蜿のた蜒たくつて来た列車は、五百人余の健児を一度にプラットフォームフォームの上に吐き出した。

「ついたようですぜ」と一人が領くびを延のばすと

「なあに、ここに立つてさえいれば大丈夫」と腹の減った男は泰然として動どうずる景色けしきもない。この男から云うと着いても着かなくても大丈夫なのだろう。それにしても腹の減った割には落ちついたものである。

やがて一二丁向うのプラツトフォームの上で万歳！ と云う声
が聞える。その声が波動のように順送りに近づいてくる。例の男
が「なあに、まだ大丈夫……」と云いい懸かけた尻尾しっぽを埋うずめて余の左右
に並んだ同勢は一度に万歳！ と叫んだ。その声の切れるか切
れぬうちに一人の將軍が挙手の礼を施しながら余の前を通り過ぎ
た。色の焦やけた、胡麻塩髯ごましおひげの小作りこづくな人である。左右の人は將軍
の後あとを見送りながらまた万歳となを唱える。余も——妙な話しだが実

は万歳を唱えた事は生れてから今日こんにちに至るまで一度もないのである。万歳を唱えてはならんと誰からも申しつけられた覚おぼえは毛頭ない。また万歳を唱えては悪わるいと云う主義でも無論ない。しかしその場に臨んでいざ大たいせい声を発しようとすると、いけない。小石で気管を塞ふさいがれたようでも万歳が咽喉のどぶえ笛へこびりついたぎり動かない。どんなに奮発しても出てくれない。——しかし今日は出してやろうと先刻さつきから決心していた。実は早くその機がくればよいがと待ち構えたくらいである。隣りの先生じやないが、なあに大丈夫と安心していたのである。喘息病みの鯨ほが吼ほえた當時からそら来たなとまで覚悟をしていたくらいだから周囲のものがワ—と云うや否や尻馬しりうまについてすぐやろうと実は舌の根まで

出しかけたのである。出しかけた途端に將軍が通つた。將軍の目に焦けた色が見えた。將軍の髯ひげの胡麻塩ごましおなのが見えた。その瞬間に出しかけた万歳がぴたりと中止してしまった。なぜ？

なぜか分るものか。なにゆえとかこのゆえとか云うのは事件が過ぎてから冷静な頭脳に復したとき當時を回想して始めて分解し得た智識に過ぎん。なにゆえが分るくらいなら始めから用心をして万歳の逆戻りを防いだはずである。予期出来ん咄嗟とつさの働きに分別が出るものなら人間の歴史は無事なものである。余の万歳は余の支配権以外に超然として止とまつたと云わねばならぬ。万歳がとまると共に胸うちの中に名状しがたい波動が込み上げて来て、両眼から一一ふたしづく雫しずくばかり涙が落ちた。

將軍は生れ落ちてから色の黒い男かも知れぬ。しかし遼東の風に吹かれ、奉天の雨に打たれ、沙河の日に射り付けられれば大抵なものは黒くなる。地体黒いものはなお黒くなる。髯もその通りである。出征してから白銀の筋は幾本も殖えたであろう。今日始めて見る我らの眼には、昔の將軍と今の將軍を比較する材料がない。しかし指を折つて日夜に待侘びた夫人令嬢が見たならば定めし驚くだろう。戦は人を殺すかさなくば人を老いしむるものである。將軍はすこぶる瘠せていた。これも苦勞のためかも知れん。して見ると將軍の身体中で出征前と変らぬのは身の丈くらいなものであろう。余のごときは黄卷青帙の間不起臥して書齋以外にいかなる出来事が起るか知らんでも済む天下の逸民

である。平生戦争の事は新聞で読まんでもない、またその状況は詩的に想像せんでもない。しかし想像はどこまでも想像で新聞は横から見ても縦から見ても紙片しへんに過ぎぬ。だからいくら戦争が続いても戦争らしい感じがしない。その気楽な人間がふと停車場に紛れ込んで第一に眼に映じたのが日に焦けた顔と霜しもに染つた髻まぎである。戦争はまのあたりに見えぬけれど戦争の結果——たしかに結果の一片いっぺん、しかも活動する結果の一片が眸ぼうてい底を掠かすめて去つた時は、この一片に誘われて満洲の大野たいやを蔽おおう大戦争の光景がありと脳裏のうりに描びようしゆつ出せられた。

しかもこの戦争の影とも見るべき一片の周囲を繞めぐる者は万歳と云う歡呼の声である。この声がすなわち満洲の野やに起つた咄とつかん喊

の反響である。万歳の意義は字のごとく読んで万歳に過ぎんが咄
 喊となるとだ**いぶ趣**おもむきが違**う**。咄喊はワ―と云うだけで万歳のよう
 に意味も何も**ない**。しかしその意味のないところに大變な深い情じょう
 が籠こもっている。人間の音声には黄色いのも濁ったのも澄んだのも
 太いのも色々あつて、その言語調子もまた分類の出来んくらい区ま
 々であるが一日二十四時間のうち二十三時間五十五分までは皆
 意味のある言葉を使っている。着衣の件、喫きつ飯ばんの件、談判の件、
 懸かけ引ひきの件、挨拶あいさつの件、雑話の件、すべて件と名のつくものは
 皆口から出る。しまいには件がなければ口から出るものは無いと
 まで思う。そこへもつて来て、件のないのに意味の分らぬ音声を
 出すのは尋常ではない。出しても用の足りぬ声を使うのは經濟主

義から云うても功利主義から云つても割に合わぬにきまつている。その割に合わぬ声を不法法に他人様の御聞おききに入れて何らの理由もないのに罪もない鼓膜こまくに迷惑かくを懸けるのはよくせきの事でなければならぬ。咄とつ喊かんはこのよくせきを煎せんじ詰めて、煮詰めて、缶詰かんづめにした声である。死ぬか生きるか娑婆しやばか地獄かと云う際きわどい針はり線りの上に立つて身震みふるいをするとき自然と横膈膜おうかくまくの底から湧わき上がる至誠の声である。助けてくれと云ううちに誠はあろう、殺すぞと叫ぶうちにも誠はない事もあるまい。しかし意味の通ずるだけそれだけ誠の度は少ない。意味の通ずる言葉を使うだけの余裕分別のあるうちは一心不乱の至境に達したとは申されぬ。咄喊にはこんな人間的な分子は交つておらん。ワーと云うのである。

このワーには厭味いやみもなければ思慮もない。理もなければ非もない。詐りいつわもなければ懸かけ引ひきもない。徹頭徹尾ワーである。結晶した精神が一度に破裂して上下四圍の空気を震しん盪とうさしてワーと鳴る。万歳の助けてくれの殺すぞのとそんなけちな意味を有してはおらぬ。ワーその物が直ただちに精神である。霊である。人間である。誠である。しかして人界崇高の感は耳を傾けてこの誠を聴き得たる時に始めて享受し得ると思う。耳を傾けて数十人、数百人、数千数万人の誠を一度に聴き得たる時にこの崇高の感は始めて無上絶大の玄げんき境ように入る。——余が將軍を見て流した涼しい涙はこの玄境の反応だろう。

將軍のあとに続いてオリーヴ色の新式の軍服を着けた士官が二

三人通る。これは出迎と見えてその表情が將軍とはだいぶ違ふ。居きよは氣を移すと云う孟子もうしの語は小供の時分から聞いていたが戦争から歸つた者と内地に暮らした人とはかほどに顔つきが變つて見えるかと思うと一層感慨が深い。どうかもう一遍將軍の顔が見たいものだと思ひ延び上つたが駄目だ。ただ場外むらに群がる数万の市民が有らん限りの鬨とぎを作つて停車場の硝子窓ガラスまどが破れるほどに響くのみである。余の左右前後の人々はようやくくに列を乱して入口の方へなだれかかる。見たいのは余と同感と見える。余も黒い波に押されて一二間石段の方へ流れたが、それぎり先へは進めぬ。こんな時には余の性しょうぶん分としていつでも損をする。寄席よせがはねて木戸を出る時、待ち合せて電車に乗る時、人込みに切符を買う時、

何でも多人数競争の折には大抵最後に取り残される、この場合にも先例に洩れず首尾よく人後に落ちた。しかも普通の落ち方ではない。遙かこなたの人後だから心細い。葬式の赤飯に手を出し損った時なら何とも思わないが、帝国の運命を決する活動力の断片を見損うのは残念である。どうにかして見てやりたい。広場を包む万歳の声はこの時四方から大濤の岸に崩れるような勢で余の鼓膜に響き渡った。もうたまらない。どうしても見なければならん。

ふと思いついた事がある。去年の春麻布のさる町を通行したら高い練堀のある広い屋敷の内では何か多人数打ち寄って遊んででもいるのか面白そうに笑う声が聞えた。余はこの時どう云う腹工

合かちよつとこの邸内を覗のぞいて見たくなつた。全く腹工合のせいに相違ない。腹工合でなければ、そんな馬鹿氣た了見の起るわけ訳がない。原因はとにかく、見たいものは見たいので原因のいかに困よつて変化出沒する訳には行かぬ。しかし今云う通り高い土塀の向う側で笑っているのだから壁に穴のあいておらぬ限りはどうてい思い通り志望を満足する事は何なんびと人の手際てぎわでも出来かねる。とうてい見る事が叶かなわないと四圍の状況から宣告を下されるとなお見てやりたくなる。愚ぐな話だが余は一目でも邸内を見なければ誓つてこの町を去らずと決心した。しかし案内も乞こわずに人の屋敷内に這入り込むのは盜賊の仕業しわざだ。と云つて案内を乞うて這入るのはなおいやだ。この邸内の者共の御世話にならず、しかもわが

人格を傷けず^{きずつ}正々堂々と見なくては心持ちがわるい。そうするには高い山から見下す^{みおろ}か、風船の上から眺める^{なが}よりほかに名案もない。しかし双方共当座の間に合うような手軽なものとは云えぬ。よし、その儀ならこつちにも覚悟がある。高等学校時代で練習した高飛の術を応用して、飛び上がった時にちよつと見てやろう。これは妙策だ、幸い人通りもなし、あつたところが自分で自分が飛び上るに文句をつけられる因縁^{いんねん}はない。やるべしと云うので、突然双脚に精一杯の力を込めて飛び上がった。すると熟練の結果は恐ろしい者で、かの土塀の上へ首が——首どころではない肩までが思うように出た。この機をはずすととうてい目的は達せられぬと、ちらつく両眼を無理に据^すえて、ここぞと思うあたりを瞥^{べっけ}

見すると女が四人でテニスをしていた。余が飛び上がるのを相
図に四人が申し合せたようにホホホと癩かんの高い声で笑った。おや
と思ううちにどたりと元のごとく地面の上に立った。

これは誰が聞いても滑稽こっけいである。冒険の主人公たる本人です
らあまり馬鹿氣ているので今日こんにち日まで何なんびと人にも話さなかつたく
らい自ら滑稽みずかと心得ている。しかし滑稽とか真面目まじめとか云うのは
相手と場合によつて変化する事で、高飛びその物が滑稽とは理由
のない言い草いぐさである。女がテニスをしているところへこつちが飛
び上がったから滑稽にもなるが、ロメオがジュリエットを見るた
めに飛び上つたつて滑稽にはならない。ロメオくらいなところで
は未だ滑稽を脱せぬと云うなら余はなお一步を進める。この凱がいせ

旋^{くん}の將軍、英名嚇^{かくかく}々たる偉人を拝見するために飛び上がるのは滑稽ではあるまい。それでも滑稽か知らん？ 滑稽だつて構うものか。見たいものは、誰が何と云つても見たいのだ。飛び上がるう、それがいい、飛び上がるにしくなしだと、とうとうまた先例によつて一蹴^{いっしゅう}を試むる事に決着した。先^まず帽子をとつて小脇に抱^かい込む。この前は経験が足りなかつたので足が引力作用で地面へ引き着けられた勢に、買^むいたての中折帽^{なかおれぼう}が挨拶^{あいさつ}もなく宙返りをして、一間ばかり向^むへ転^{ころ}がった。それをから車を引いて通り掛つた車夫が拾つて笑いながらえへへと差し出した事を記憶している。こんどはその手は喰^くわぬ。これなら大丈夫と帽子を確^{しか}と抑えながら爪先で敷石^{はじ}を弾く心持で暗に姿勢を整える。人後に

落ちた仕合せには邪魔になるほど近くに人もおらぬ。しばし衰えた、歓声は盛り返す潮うしおの岩に砕けたようにあたり一面に湧わき上がる。ここだと思ひ切つて、両足が胴のなかに飛び込みはしまいかと疑うほど脚力をふるつて跳はね上つた。

幌ほろを開いたランドウが横向に凱旋門がいせんもんを通り抜けようとする中に——いた——いた。例の黒い顔が湧わき返る声に囲まれて過去の紀念のごとく華はなやかなる群衆の中に点じ出されていた。將軍を迎えた儀仗兵ぎしょうへいの馬が万歳の声に驚ろいて前足を高くあげて人込の中にそれようとするのが見えた。將軍の馬車の上に紫の旗が一流れ颯さつとなびくのが見えた。新橋へ曲る角の三階の宿屋の窓から藤ふ鼠ねずみの着物をきた女が白いハンケチを振るのが見えた。

見えたと思うより早く余が足はまた停車場の床ゆかの上に着いた。すべてが一瞬間の作用である。ぱつと射る稲妻の飽あくまで明るく物を照らした後あとが常よりは暗く見えるように余は茫ぼう然ぜんとして地に下りた。

將軍の去つたあとは群衆も自おのずから乱れて今までのように静肅ではない。列を作つた同勢の一角いっかくが崩くずれると、堅い黒山が一度に動き出して濃い所がだんだん薄くなる。気早きばやな連中はもう引き揚げると見える。ところへ將軍と共に汽車を下りた兵士が三々五々隊を組んで場内から出てくる。服地の色は褪さめて、ゲートルの代りには黄な羅紗らしやを畳たたまんでぐるぐると脛すねへ巻きつけている。いずれもあらん限りの髻ひげを生はやして、出来るだけ色を黒くしている。こ

れらも戦争の片破れである。大和魂を鑄固めた製作品である。
 実業家も入らぬ、新聞屋も入らぬ、芸妓も入らぬ、余のごとき
 書物と睨めくらをしているものは無論入らぬ。ただこの髯茫茫々
 として、むさくるしき事乞食を去る遠からざる紀念物のみはな
 くて叶わぬ。彼らは日本の精神を代表するのみならず、広く人類
 一般の精神を代表している。人類の精神は算盤で弾けず、三味
 線に乗らず、三頁にも書けず、百科全書中にも見当らぬ。ただこ
 の兵士らの色の黒い、みすぼらしいところに髯鬚として揺曳
 している。出山の釈迦はコスメチックを塗つてはおらん。金
 の指輪も穿めておらん。芥溜から拾い上げた雑巾をつぎ合せ
 たようなもの一枚を羽織つてはかりじゃ。それすら全身を掩

うには足らん。胸のあたりは北風の吹き抜けで、肋骨の枚数は自由に読めるくらいだ。この釈迦が尊ければこの兵士も尊といと云わねばならぬ。昔し元寇の役に時宗が仏光国師に謁した時、国師は何と云うた。威を振って驀地に進めと吼えたのみである。このむさくろしき兵士らは仏光国師の熱喝を喫した訳でもなからうが驀地に進むと云う禅機において時宗と古今その揆を一にしている。彼らは驀地に進み了して曠如と吾家に帰り来りたる英靈漢である。天上を行き天下を行き、行き尽してやまざる底の気魄が吾人の尊敬に価せざる以上は八荒の中に尊敬すべきものは微塵ほどもない。黒い顔！ 中には日本に籍があるのかと怪まれるくらい黒いのがいる。——刈り込まざる髯！ 棕櫚箒を

砧きぬたで打うつたよううな髻み——この氣魄きはくは這裏しやりに磅ほうはくとして蟠わたかまり沈こ

 澆うようとして漲みなぎっている。

兵士の一隊が出てくるたびに公衆は万歳となを唱となえてやる。彼らのあるものは例の黒い顔に笑えみを湛たたえて嬉うれし氣げに通とり過へぎる。あるものは傍わきめ目もふらずのそのそと行く。歡迎とはいかなる者ぞと不審ふしん氣に見える顔もたまには見える。またある者は自己の歡迎旗の下に立たつて揚ようよう々おくと後おくれて出でる同輩どうばいを眺ながめている。あるいは石段いしだんを下くだるや否いなや迎むかへものえに擁ようせられて、あまりの不意ふい撃うちに挨拶あいさつさえも忘れて誰彼の容赦なく握手の礼を施せこしている。出征中に満洲で覚おぼえたのであろう。

その中に——これがはからずもこの話をかく動機になつたので

あるが——年の頃二十八九の軍曹が一人いた。顔は他の先生方と異なる^{こと}ところなく黒い、髯^{ひげ}も延びるだけ延ばしておそらくは去年から持ち越したものと思われるが目鼻立ちはほかの連中とは比較にならぬほど立派である。のみならず亡友^{ごう}浩さんと兄弟と見違えるまでよく似ている。実はこの男がただ一人石段を下りて出た時ははつと思つて馳^かけ寄ろうとしたくらいであつた。しかし浩さんは下士官ではない。志願兵から出身した歩兵中尉である。しかも故歩兵中尉で今では白山の御寺に一年余^よも厄^{やっかい}介になつている。だからいくら浩さんだと思いたくつても思えるはずがない。ただ人情は妙なものでこの軍曹が浩さんの代りに旅順で戦死して、浩さんがこの軍曹の代りに無事で還^{かえ}つて来たらさぞ結構であろう。

御母さんもおつかも定めし喜ばれるであろうと、露見する気づかないものだから勝手な事を考えながら眺めていた。軍曹も何か物足らぬと見えてしきりにあたりを見廻している。ほかのもののように足早に新橋の方へ立ち去る景色もない。何を探がしているのだらう、もしや東京のものでなくて様子が分らんのなら教えて遣りた
いと思つてなお目を放さずに打ち守っていると、どこをどう潜り
抜けたものやら、六十ばかりの婆さんが飛んで出て、いきなり軍
曹の袖にぶら下がった。軍曹は中肉ではあるが背は普通よりたし
かに二寸は高い。これに反して婆さんは人並はずれて丈が低い上
に年のせいで腰が少々曲っているから、抱き着いたとも寄り添う
たとも形容は出来ぬ。もし余が脳中にある和漢の字句を傾けて、

その中からこのありさまを叙するに最も適當なる詞を探したならば必ずぶら下がるが当選するにきまつている。この時軍曹は紛失物が見当たつたと云う風で上から婆さんを見下す。婆さんはやつと迷児を見つけたと云う体で下から軍曹を見上げる。やがて軍曹はあゝるき出す。婆さんもあるき出す。やはりぶらさがつたままである。近辺に立つ見物人は万歳万歳と兩人を囃したてる。婆さんは万歳などには毫も耳を借す景色はない。ぶら下がつたぎり軍曹の顔を下から見上げたまま吾が子に引き摺られて行く。冷飯草履と鋤を打つた兵隊靴が入り乱れ、もつれ合つて、うねりくねつて新橋の方へ遠かつて行く。余は浩さんの事を思い出して悵然と草履と靴の影を見送つた。

浩こうさん！ 浩こうさんは去年の十一月旅順で戦死した。二十六日は
 風の強く吹く日であつたそうだ。遼りょうとう東たいやの大野を吹きめぐつて、
 黒い日を海に吹き落そうとする野分のわきの中に、松樹山しょうじゆざんの突撃は
 予定のごとく行われた。時は午後一時である。掩護えんごのために味方
 の打ち出した大砲が敵塁の左突角ひだりとつかくに中あたつて五丈ほどの砂煙すなけむ
 りを捲まき上げたのを相凶さんべいごうに、散兵壕から飛び出した兵士の数は
 幾百か知らぬ。蟻ありの穴を蹴返けかえしたごとくに散り散りに乱れて前面
 の傾斜を攀よじ登る。見渡す山腹は敵の敷いた鉄条網で足を容いるる

余地もない。ところを梯子はしごを担にない土囊どのうを背負しよつて区々まちまちに通なり抜ける。工兵の切り開いた二間に足らぬ路は、先を争う者のために奪あわれて、後あとより詰めかくる人の勢に波を打つ。こちらから眺ながめるとただ一筋の黒い河が山を裂いて流れるように見える。その黒い中に敵の弾丸は容赦なく落ちかかつて、すべてが消え失せたと思あうくらい濃こい煙が立ち揚あがる。怒いかる野分は横さまに煙りを千切ちぎつて遙はかの空に攫さらつて行く。あとには依然として黒い者が簇そうぜん然ぜんと蠢うごめいている。この蠢めいているものうちに浩さんがいる。

火桶ひおけを中に浩さんと話をするときには浩さんは大きな男である。色の浅黒い髭ひげの濃ひげい立派な男である。浩さんが口を開いて興に乗った話をするときは、相手の頭の中には浩さんのほか何もない。

きよう 今日の事も忘れ明日あすの事も忘れ聴きき惚ほれている自分の事も忘れて
浩さんだけになつてしまふ。浩さんはかように偉大な男である。
どこへ出しても浩さんなら大丈夫、人の目に着くにきまつている
と思つていた。だから蠢むしめいているなどと云う下等な動詞は浩さ
んに対して用いたくない。ないが仕方がない。現に蠢むしめいている。
鍬くわの先に掘ほり崩くずされた蟻群ぎぐんの一匹のごとく蠢むしめいている。杓ひしゃくの水
を喰くらつた蜘蛛くもの子のごとく蠢むしめいている。いかなる人間もこうな
ると駄目だ。大いなる山、大いなる空、千里を馳かけ抜ける野分、
八方を包む煙り、鑄しゆてつ鉄てつの咽喉のんどから吼ほえて飛たぶ丸たま——これらの前
にはいかなる偉人も偉人として認められぬ。俵たわに詰ぢめた大豆だいずの一
粒のごとく無意味に見える。嗚呼あ浩さん！ 一体どこで何をして

いるのだ？ 早く平生の浩さんになつて一番露助ろすけを驚かしたらよ
かろう。

黒くむらがる者は丸たまを浴びるたびにぱつと消える。消えたかと思ふと吹き散る煙の中に動いている。消えたり動いたりしているうちに、蛇へびの堀へいをわたるように頭から尾まで波を打つてしかも全体が全体としてだんだん上へ上へと登つて行く、もう敵墨だ。浩さん真先に乗り込まなければいけない。煙の絶間から見ると黒い頭の上に旗らしいものが靡なびいている。風の強いためか、押し返されるせいか、真直ぐに立つたと思ふと寝る。落ちたのかと驚ろくとまた高くあがる。するとまた斜ななめに仆たおれかかる。浩さんだ、浩さんだ。浩さんに相違ない。多たにんず人数集まつて揉もみに揉んで騒いで

いる中にもし一人でも人の目につくものがあれば浩さんに違いない。自分の妻は天下の美人である。この天下の美人が晴れの席へ出て隣りの奥様と撰ぶところなくいつこう目立たぬのは不平な者だ。己れの子が己れの家庭にのさばっている間は天にも地にも懸替おののない若旦那である。この若旦那が制服を着けて学校へ出ると、向うの小間物屋のせがれと席を列べて、しかもその間に少しも懸隔のないように見えるのはちよつと物足らぬ感じがするだろう。余の浩さんにおけるもその通り。浩さんはどこへ出しても平生の浩さんらしくなければ気が済まん。搦鉢すりばちの中に攪き廻される里芋といものごとく紛然雜然とゴロゴロしてはどうしても浩さんらしくない。だから、何でも構わん、旗を振ろうが、劍を翳かざそうが、

とにかくこの混乱のうちに少しなりとも人の注意を惹ひくに足はたらきをするものを浩さんにしたい。したい段ではない。必ず浩さんにきまつている。どう間違つたつて浩さんが碌ろくろく々々として頭角をあらわさないなどと云う不見識な事は予期出来るのである。——それだからあの旗持は浩さんだ。

黒い塊かたまりが敵塁の下まで来たから、もう塁壁を攀よじ上のぼるだろうと思ううち、たちまち長い蛇へびの頭はぽつりと二三寸切れてなくなつた。これは不思議だ。丸たまを喰くらつて斃たおれたとも見えない。狙撃そげきを避けるため地に寝たとも見えない。どうしたのだろう。すると頭の切れた蛇がまた二三寸ぷつりと消えてなくなつた。これは妙だと眺ながめていると、順じゆんぐり繰あがに下から押し上る同勢が同じ所へ来る

や否いなやたちまちなくなる。しかも砦とりでの壁には誰一人としてとりついたものがない。塹壕ざんごうだ。敵壘と我兵の間にはこの邪魔物がある。この邪魔物を越さぬ間は一人も敵ちかづに近く事は出来ないのであつて、彼らはえいえいと鉄条網を切り開いた急坂きゆうはんを登りつめた。揚句あげく、この壕ほりの端はたまで来て一も二もなくこの深い溝みぞの中に飛び込んだのである。担になっている梯子はしごは壁に懸けるため、背負しよっている土囊どのおうは壕ほりを埋うずめるためと見えた。壕はどのくらい埋うまったか分らないが、先の方から順々に飛び込んではなくなり、飛び込んではなくなつてとうとう浩さんの番に来た。いよいよ浩さんだ。しつかりしなくてはいけない。

高く差し上げた旗が横に靡なびいて寸断すたすた寸断すたすたに散るかと思うほど強

く風を受けた後、のち旗竿はたざおが急に傾いて折れたなど疑う途端とたんに浩さん
 の影はたちまち見えなくなつた。いよいよ飛び込んだ！ 折か
にりゆうざんら二竜山の方面より打ち出した大砲が五六発、大空に鳴る烈風
つんざを劈いて一度に山腹に中あたつて山の根を吹き切るばかり轟とどろき渡る。
ほとぼすなけむりさび逆はつふゆしる砂煙は淋こしき初冬の日蔭を籠めつくして、見渡す限りに
おわ有りとおある物を封じ了る。浩さんはどうなつたか分らない。気が
 気でない。あの煙の吹いている底だと思当をつけて一心に見守る。
 夕立を遠くから望むように密おほに蔽い重なる濃き者は、烈はげしき風の
まきかえ捲返してすくい去ろうと焦あせる中に依然として凝こり固つて動かぬ。
 約二分間は眼をいくら擦こすつても盲目めくら同然どうする事も出来ない。
 しかしこの煙りが晴れたら——もしこの煙りが散り尽したら、き

つと見えるに違ない。浩さんの旗が壕の向側むこうがわに日を射返して耀かがやき渡つて見えるに違ない。否向側いなを登りつくしてあの高く見えるひめがきの上に翻へん々と翻ひるつてがえいるに違ない。ほかの人ならとにかく浩さんだから、そのくらいの事は必ずあるにきまつている。早く煙が晴ればいい。なぜ晴れんだろう。

占しめた。敵塁の右の端はじの突角の所が臃おぼろげ気に見え出した。中央の厚く築き上げた石壁せきへきも見え出した。しかし人影はない。はてな、もうあすこらに旗が動いているはずだが、どうしたのだろうか。それでは壁の下の土手の中頃にぜんじいるに相違ない。煙は拭ぬぐうがごとく一掃ひとばきに上から下まで漸次ぜんじに晴れ渡る。浩さんはどこにも見えない。これはいけない。田螺たにしのように蠢うごめいていたほかの連中も

どこにも出現せぬ様子だ。いよいよいけない。もう出るか知らん、
 五秒過ぎた。まだか知らん、十秒立った。五秒は十秒と変じ、十
 秒は二十、三十と重なっても誰一人の塹壕から向うへ這い上
 る者はない。ないはずである。塹壕に飛び込んだ者は向へ渡すた
 めに飛び込んだのではない。死ぬために飛び込んだのである。彼
 らの足が壕底に着くや否や穹窞より觜を定めて打ち出す機
 関砲は、杖を引いて竹垣の側面を走らす時の音がして瞬く間に彼
 らを射殺した。殺されたものが這い上がれるはずがない。石を置
 いた沢庵のごとく積み重なって、人の眼に触れぬ坑内に横わる
 者に、向へ上がれと望むのは、望むものの無理である。横わる者
 だって上がりたいだろう、上りたければこそ飛び込んだのである。

いくら上がりたくても、手足が利きかなくては上がれぬ。眼くらが暗くらんでは上がれぬ。胴あに穴あが開あいては上がれぬ。血ちが通とわなくなつても、脳のう味噌ずが潰つぶれても、肩かたが飛とんでも身からだ体が棒ぼうのようにしやちこぼ 鯨しやちこぼ 張ばつても上がる事は出来きせん。二に竜りゅう山ざんから打う出した砲ぱう煙えんが散さんじ尽じんした時に上あがれぬばかりではない。寒さむい日ひが旅りょ順じゆんの海うみに落おちて、寒さむい霜しもが旅りょ順じゆんの山やまに降ふつても上あがる事は出来きせん。ステツセルが開あ城じやうして二十にじゅうの砲ぱう 砦さいがこごとごとく日本にっぽんの手てに帰かへしても上あがる事は出来きせん。日ひ露るの講かう和わが成じやう 就じゆして乃の木ぎ将じやう軍ぐんがめめででたくたく凱がい旋せんしても上あがる事は出来きせん。百ひゃく年ねん三さん万まん六りく千せん日にち乾けん 坤こんを提ひげげて迎むかへて来きても上あがる事はついにできぬ。これがこの塹えん壕ごうに飛とび込こんだもの運うん命めいである。しかしてまた浩こうさんの運うん命めいである。蠢しゆん々しゆんとして御おたま

玉杓子じやくしのごとく動いていたものは突然とこの底のない坑あなのうち
に落ちて、浮世の表面から闇やみの裡うちに消えてしまった。旗を振ろう
が振るまいが、人の目につこうがつくまいがこうなって見ると変
りはない。浩さんがしきりに旗を振ったところはよかったが、壕ほり
の底では、ほかの兵士と同じように冷たくなって死んでいたそう
だ。

ステツセルは降くだった。講和は成立した。將軍は凱旋した。兵隊
も歓迎された。しかし浩さんはまだ坑から上って来ない。凶はからず
新橋へ行つて色の黒い將軍を見、色の黒い軍曹を見、背せの低い軍
曹おっかの御母さんを見て涙まで流して愉快に感じた。同時に浩さんは
なぜ壕から上がって来こんのだろうと思つた。浩さんにも御母さん

がある。この軍曹のそれのように背は低くない、また冷飯草履ひやめしぞうりを穿はいた事はあるまいが、もし浩さんが無事に戦地から帰つてきて御母さんが新橋へ出迎えに来られたとすれば、やはりあの婆さんのようにぶら下がるかも知れない。浩さんもプラットフォームの上で物足らぬ顔をして御母さんの群集の中から出てくるのを待つだろう。それを思うと可哀そうなのは坑を出て来ない浩さんよりも、浮世の風にあたっている御母さんだ。塹壕ざんごうに飛び込むまではとにかく、飛び込んでしまえばそれまでである。娑婆しやばの天気は晴であろうとも曇であろうとも頓とんじやく着ちやくはなからう。しかし取り残された御母さんはそうは行かぬ。そら雨が降る、垂たれ籠こめて浩さんの事を思い出す。そら晴れた、表へ出て浩さんの友達に逢あ

う。歓迎で国旗を出す、あれが生きていたらと愚痴ぐちつぽくなる。

洗せん湯とうで年頃の娘が湯を汲くんでくれる、あんな嫁がいたらと昔を

思しぶの。これでは生きているのが苦痛である。それも子福者である

なら一人なくなっても、あとに慰めてくれるものもある。しかし

親一人子一人の家族が半分欠けたら、瓢ひょう箆たんの中から折れたと

同じようなものでしめ括くりがつかぬ。軍曹の婆さんではないが年

寄りのぶら下がるものがない。御母さんは今に浩こう一いちが帰つて来

たらばと、皺しわだらけの指を日夜にちやに折り尽してぶら下がる日を待ち

焦こがれたのである。そのぶら下がる当人は旗を持って思い切りよ

く塹壕の中へ飛び込んで、今に至るまで上がって来ない。白髪しらかは

増したかも知れぬが將軍は歡呼かんこの裡うちに帰来きらいした。色は黒くなって

も軍曹は得意にプラットフォームの上に飛び下りた。白髪になるうと日に焼けようと帰りさえすればぶら下がるに差し支えはない。右の腕を繻帯ほうたいで釣るして左の足が義足と変化しても帰りさえすれば構わん。構わんと云うのに浩さんは依然として坑あなから上がって来ない。これでも上がって来ないなら御母さんの方からあとを追いかけて坑の中へ飛び込むより仕方がない。

幸い今日は閑ひまだから浩さんのうちへ行つて、久し振りに御母さんを慰めてやろう？ 慰めに行くのはいいが、あすこへ行くと、行くたびに泣かれるので困る。せんだつてなどは一時間半ばかり泣き続けに泣かれて、しまいには大抵な挨拶あいさつはし尽して、大おおに応対に窮したくらいだ。その時御母さんはせめて気立ての優しい嫁

でもおりましたら、こんな時には力になりますのにとしきりに嫁々と繰り返して大に余を困らせた。それも一段落告げたからもう善よかろうと御免蒙ごめんうむりかけると、あなたに是非見て頂くものがあるとうから、何ですと聴いたら浩一の日記ですと云う。なるほど亡友の日記は面白からう。元来日記と云うものはその日その日の出来事を書き記しるのみならず、また時々じじこつこく刻々の心ゆきを遠慮なく吐き出すものだから、いかに親友の手帳でも断りなしに目を通す訳には行かぬが、御母さんが承諾する——否いな先方から依頼する以上は無論興味のある仕事に相違ない。だから御母さんに読んでくれと云われたときは大に乗気になってそれは是非見せてちようだいとまで云おうと思つたが、この上また日記で泣かれるよ

うな事があつては大変だ。とうてい余の手際てぎわでは切り抜ける訳には行かぬ。ことに時刻を限つてある人と面会の約束をした刻限もせま逼つてゐるから、これは追つて改めて上がつてゆるゆる緩々拜見を致す事に願ひましようと思つて逃げ出したくらいである。以上の理由で訪問はちと辟易へきえきの体ていである。もつとも日記は読みたくない事もない。泣かれるのも少しなら厭いやとは云わない。元々木や石で出来上つたと云う訳ではないから人の不幸に對して一滴の同情くらいは優ゆうに表し得る男であるがいかんせん性しょうらい来余り口の製造に念が入いつておらんので応対に窮する。御母さんがまああなた聞いて下さいましと啾すすり上げてくると、何と受けていいか分らない。それを無理矢理に体裁ていさいを繕つくろつて半間はんまに調子を合せようとするか

くの慰藉いしや的好意が水泡と変化するのみならず、時には思いも寄らぬ結果を呈出して熱湯とまで沸騰ふっとうする事がある。これでは慰めに行つたのか怒らせに行つたのか先方でも了解に苦しむだろう。行きさえしなければ薬も盛らん代りに毒も進めぬ訳だから危険はない。訪問はいずれその内として、まず今日は見合せよう。

訪問は見合せる事にしたが、昨日きのうの新橋事件を思い出すと、どうも浩さんの事が気に掛つてならない。何らかの手段で親友とむらを弔つてやらねばならん。悼亡とうぼうの句などは出来る柄がらでない。文才があれば平生の交際をそのまま記述して雑誌にでも投書するがこの筆ではそれも駄目と。何かないかな？ うむあるある寺参りだ。浩さんは松樹山しょうじゆざんの塹壕ざんごうからまだ上あがつて来ないがその紀念の

遺髪は遥かはるの海を渡つて駒込の寂光院じやくこういんに埋葬された。ここへ行つて御参りをしてきようと西片町にしかたまちの吾家わがやを出る。

冬の取とつ付きである。小春こはると云えば名前を聞いてさえ熟柿じゆくしの

ようないい心持になる。ことに今年ことしはいつになく暖かなので袷あわせ

羽織ばおりに綿入わたいれ一枚の出いで立ちたささえ軽々かるがるとした快い感じを添え

る。先の斜ななめに減つえつた杖を振り廻しながら寂光院と大師流だいらいりゆうに古

紺こんじよう青で彫りつけた額ながを眺めて門を這はい入ると、精舎しょうじやは格

別なもので門内は蕭条しょうじようとして一塵あつとの痕も留めぬほど掃除が行

き届ひいている。これはうれしい。肌はだの細かな赤土あかぢが泥濘ぬかりもせず

干乾ひからびもせず、ねっとりとして日の色を含んだ景色けしきほどありがた

いものはない。西片町は学者町か知らないが雅がな家は無論の事、

落ちついた土の色さえ見られないくらい近頃は住宅が多くなつた。学者がそれだけ殖ふえたのか、あるいは学者がそれだけ不風流なのか、まだ研究して見ないから分らないが、こうやって広々とした境けいだい内へ来ると、平生は学者町で満足を表していた眼にも何となく坊主の生活が羨うらやましくなる。門の左右には周囲二尺ほどな赤松が泰然として控えている。大おおかた方百年くらい前からかくのごとく控えているのだらう。鷹おうよう揚なところが頼母たのもしい。神無かんなづき月の松の落葉とか昔は称とこなえたものだそうだが葉を振ふるつた景色は少しも見えない。ただ蟠わだかまつた根が奇麗な土の中から瘤こぶだらけの骨を一二寸露あらわしているばかりだ。老僧か、小坊主か納所なつしよかあるいは門番が凝こりしやう性せいで大おおかた方日に三度くらい掃はくのだらう。松を左右に見て

半町ほど行くとつき当りが本堂で、その右が庫裏である。本堂の正面にも金泥きんでいの額がくが懸かかつて、鳥の糞ふんか、紙を噛かんで叩たたきつけたのか点々と筆者の神聖を汚けがしている。八寸角の櫺けやき柱ばしらには、のたくった草書の聯れんが読めるなら読んで見ると澄すましてかかつている。なるほど読めない。読めないとところをもつて見るとよほど名家の書いたものに違いない。ことによると王羲之おうぎしかも知れない。えらそうで読めない字を見ると余は必ず王羲之にしたくなる。王羲之にしないと古い妙な感じが起らない。本堂を右手に左へ廻ると墓場である。墓場の入口には化銀杏ばけいちようがある。ただし化ばけの字は余のつけたのではない。聞くところによるとこの界隈かいわいで寂光院のばけ銀杏と云えば誰も知らぬ者はないそうだ。しかし何が化ばけ

たつて、こんなに高くはなりそうもない。三抱みかかえもあろうと云う
大木だ。例年なら今頃はとくに葉を振ふるつて、から坊主になつて、
野分のわきのなかに唸うなつているのだが、今年ことしは全く破格な時候なので、
高い枝がことごとく美しい葉をつけている。下から仰ぐと目に余
る黄金こがねの雲が、穏おだやかな日光を浴びて、ところどころ鼈べつこう甲べつこうのよう
に輝くからまぼしいくらい見事である。その雲の塊かたまりが風もない
のにはらはらと落ちてくる。無論薄い葉の事だから落ちても音は
しない、落ちる間もまたすこぶる長い。枝を離れて地に着くまで
の間にあるいは日に向いあるいは日に背そむいて色々な光を放つ。色
々に変りはするものの急けしきぐ景色もなく、至つて豊かに、至つてし
とやかに降つて来る。だから見ていると落つるのではない。空中

を揺曳ようえいして遊んでいようように思われる。閑静である。——すべてのものの動かぬのが一番閑静だと思うのは間違っている。動かない大面積の中に一点が動くから一点以外の静さが理解できる。しかもその一点が動くと言う感じを過かちよう重ちゆうならしめぬくらい、否いなその一点の動く事みづかそれ自じらが定じよう寂じやくの姿を帯びて、しかも他の部分の静粛なありさまを反思はんしせしむるに足るほどに靡なびいたなら——その時が一番閑かん寂じやくの感を与える者だ。銀杏いちようの葉の一陣の風なきに散る風情ふせいは正にこれである。限りもない葉が朝あした夕ゆうを厭いとわず降ってくるのだから、木の下は、黒い地の見えぬほど扇形せんけいの小さい葉で敷きつめられている。さすがの寺僧じそうもここまでは手が届かぬと見えて、当座は掃除はんの煩わづらを避けたものか、または堆うずたかき

落葉を興ある者と眺めて、打ち棄てて置くのか。とにかく美しい。
 しばらく化銀杏ばけいちようの下に立つて、上を見たり下を見たり佇たたずんで
 いたが、ようやくの事幹のもとを離れていよいよ墓地の中へ這入はい
 り込んだ。この寺は由緒ゆいしよのある寺だそうだとどこどこに大き
 な蓮れんだい台の上に据すえつけられた石塔が見える。右手のかた方に柵さくを控
 えたのには梅花ばいかい院いん殿でん瘠鶴せきかく大居士だいこじとあるから大おお方かた大名か旗本
 の墓かぶだろう。中には至極しじく簡略で尺たらずのもある。慈雲童子と楷か
いしよ書で彫つてある。小供だから小さいわけ訳だ。このほか石塔も沢山
 ある、戒名も飽きるほど彫りつけてあるが、申し合わせたように
 古いのばかりである。近頃になつて人間が死なくなつた訳でも
 あるまい、やはり従前のごとく相應もうじやの亡者もうじやは、年々御客様とな

つて、あの剥はげかかった額くわくの下を潜くぐるに違ちがない。しかし彼らがひとたび化銀杏けいぎやうの下を通り越こすや否いなや急いそに古ふるる仏ぼとけとなつてしまふ。何も銀杏けいぎやうのせいと云う訳わけでもなからうが、大方たうほうの檀家だんかは寺僧ていそうの懇請こんきんで、余り広ひろくない墓地ぼたの空くう所しよを狭せまめずに、先祖代々せんぞだいだいの墓ぼの中に新しん仏ぼとけを祭まつり込こむからであらう。浩こうさんも祭まつり込こまれた一人ひとりである。

浩こうさんの墓ぼは古ふるいと云う点てんにおいてこの古ふるい卵塔婆らんとうば内うちでだ**い**ぶ幅はばの利きく方かたである。墓ぼはいつ頃ころ出来たものか確しかとは知しらぬが、何でも浩こうさんの御父おとつさんが這入まり、御爺おじいさんも這入まり、そのまた御爺おじいさんも這入まったとあるからけつして新あららしい墓ぼとは申まされな**い**。古ふるい代しろりには形勝けいしやうの地ちを占うめて**い**る。隣りんり寺ていを境さかいに一段

高くなつた土手の上に三坪ほどな平地へいちがあつて石段を二つ踏んで行きあた当りの真中にあるのが、御爺さんも御父さんも浩さんも同居して眠っている河上家代々之墓である。極めてきわ分りわかやすい。化銀杏を通り越して一筋道を北へ二十間歩けばよい。余は馴れた所だから例のごとく例の路みちをたどつて半分ほど来て、ふと何の気なしに眼をあげて自分の詣まいるべき墓の方を見た。

見ると！ もう来ている。誰だか分らないが後うしろ向むきになつてしきりに合掌している様子だ。はてな。誰だろう。誰だか分りようはないが、遠くから見ても男でないだけは分る。恰かつこう好かから云つてもたしかに女だ。女なら御母おつかさんか知らん。余は無頓着むとんじやくの性質で女の服装などはいっこう不案内だが、御母さんは大抵黒繻くろじゆ

子の帯をしめている。ところがこの女の帯は——後から見ると最も人の注意を惹く、女の背中いっぱいひに広がっている帯は決して黒っぽいものでもない。光彩陸離こうさいりくりたるやたらに奇麗きれいなものだ。若い女だ！と余は覚え口の中で叫んだ。こうなると余は少々ばつがわるい。進むべきものか退くべきものかしりぞちよつと留つて考へて見た。女はそれとも知らないから、しゃがんだまま熱心に河上家代々の墓を礼拝している。どうも近寄りにくい。さればと云つて逃げるほど悪事を働いた覚おぼえはない。どうしようかと迷っている。と女はすつくら立ち上がった。後ろは隣りの寺の孟宗もうそう藪やぶで寒いほど緑りの色が茂っている。その滴したたるばかり深い竹の前にすつくりと立った。背景が北側の日影で、黒い中に女の顔が浮き出し

たように白く映る。眼の大きな頬しまの緊えりった領の長い女である。右の手をぶらりと垂れて、指の先でハンケチの端はじをつかんでいる。そのハンケチの雪のように白いのが、暗い竹の中に鮮あざやかに見える。顔とハンケチの清く染め抜かれたほかは、あつと思つた瞬間に余の眼には何物も映らなかつた。

余がこの年としになるまでに見た女の数は夥おびただしいものである。往来の中、電車の上、公園の内、音楽会、劇場、縁日、随分見たと云つて宜よろしい。しかしこの時ほど驚ろいた事はない。この時ほど美しいと思つた事はない。余は浩さんの事も忘れ、墓はかま詣りに来た事も忘れ、きまりが悪わるいと云う事さえ忘れて白い顔と白いハンケチばかり眺ながめていた。今までは人が後ろにいようとは夢にも知

らなかつた女も、帰ろうとして歩き出す途端に、茫然ぼうぜんとして佇たたずんでゐる余の姿が眼に入いつたものと見えて、石段の上にもちよつと立ち留とどまつた。下から眺めた余の眼と上から見下みおろす女の視線が五間を隔へだてて互に行き当つた時、女はすぐ下を向いた。すると飽あくまで白い頬に裏から朱を溶といて流したような濃い色がむらむらと煮染にじみ出した。見るうちにそれが顔一面に広がつて耳の付根まで真赤に見えた。これは気の毒な事をした。化銀杏ばけいちようの方へ逆戻りをしよう。いやそうすればかえつて忍び足あとに後でもつけて来たように思われる。と云つて茫然と見とれてはなお失礼だ。死地に活を求むと云う兵法もあると云う話しだからこれは勢よく前進するにしくはない。墓場へ墓詣りをしに来たのだから別に不思

議はあるまい。ただ躡ちゆうちよ躡ちよするから怪しまれるのだ。と決心して例のステツキを取り直して、つかつかと女の方にあるき出した。すると女も俯うつむ向いたまま歩を移して石段の下で逃げるように余の袖そでの傍そばを擦すりぬける。ヘリオトロープらしい香かおりがぷんとする。香が高いので、小春日に照りつけられた裕羽織あわせばおりの背せなか中からしみ込んだような気がした。女が通り過ぎたあとは、やっと安心して何だか我に帰った風に落ちついたので、元来何者だろうとまた振り向いて見る。すると運悪くまた眼と眼が行き合った。こんどは余は石段の上に立つてステツキを突いている。女は化銀杏ばけいちようの下で、行きかけた体たいを斜ななめに振ねじつてこつちを見上げている。銀杏は風なきになおひらひらと女の髪の上、袖そでの上、帯の上へ舞いさが

る。時刻は一時か一時半頃である。ちょうど去年の冬浩さんが大
 風の中を旗を持って散兵壕から飛び出した時である。空は研ぎ上
 げた剣つるぎを懸かけつらねたごとく澄うすんでいる。秋の空の冬に変わる間際まぎわ
 ほど高く見える事はない。羅うすものに似た雲の、微かすかに飛ぶ影ひとみうちも眸まの裡
 には落ちぬ。羽根があつて飛び登ればどこまでも飛び登れるに相
 違ちがない。しかしどこまで昇つても昇り尽せはしまいと思われるの
 がこの空である。無限と云う感じはこんな空を望んだ時に最もよ
 く起る。この無限に遠く、無限に遐はるかに、無限に静かな空を会えしや
 釈くもなく裂いて、化銀杏こがねが黄金こがねの雲を凝こらしている。その隣に
 は寂光院の屋根やねがわら瓦わらが同じくこの蒼そうきゆう穹ゆうの一部を横かくに劃かくして、
 何十万枚重かさなつたものか黒々と鱗うろこのごとく、暖かき日影を射返し

ている。——古き空、古き銀杏、古き伽藍がらんと古き墳墓かむそが寂じやく 寞まく
 として存在する間に、美くしい若い女が立っている。非常な対照
 である。竹藪うしを後ろうしろに背負しよつて立つた時はただ顔の白いのとハン
 ケチの白いのばかり目に着いたが、今度はすらりと着こなした衣きぬ
 の色と、その衣を真中から輪きに截きつた帯の色がいちじるしく目立
 つ。縞柄しまがらだの品物などは余のような無風流漢には残念ながら記
 述出来んが、色合だけはたしかに華はなやかな者だ。こんな物寂ものさびた
 境けい内ないに一分たりともいるべき性質のものでない。いるとすれば
 どこからか戸とまど迷まいをして紛れまぎ込んで来たに相違ない。三越陳列場
 の断片を切り抜いて落柿舎らくししやの物干竿ものほしざおへかけたようなものだ。
 対照の極とはこれであろう。——女は化銀杏の下から斜めに振り

返つて余が詣る墓のありかを確かめて行きたいと云う風に見えたが、生憎余の方でも女に不審があるので石段の上から眺め返したから、思い切つて本堂の方へ曲つた。銀杏はひらひらと降つて、黒い地を隠す。

余は女の後姿を見送つて不思議な対照だと考えた。昔し住吉の祠で芸者を見た事がある。その時は時雨の中に立ち尽す島田姿が常よりは妍やかに余が瞳を照らした。箱根の大地獄で二八余りの西洋人に遇つた事がある。その折は十丈も煮え騰る湯煙りの凄じき光景が、しばらくは和らいで安慰の念を余が頭に与えた。すべての対照は大抵この二つの結果よりほかには何も生ぜぬ者である。在来の鋭どき感じを削つて鈍くするか、または新たに視界に

現わるる物象を平時よりは明瞭めいりょうに脳裏のうりに印し去るか、これが普通吾人の予期する対照である。ところが今睹みた対象は毫ごうもそんな感じを引き起さなかつた。相除そうじよの対照でもなければ相乘そうじようの対照でもない。古い、淋さびしい、消極的な心の状態が減じた景色はさらにない、と云つてこの美しい綺羅きらを飾つた女の容姿が、音楽会や、園遊会で逢あうよりは一ひと際きわ目立つて見えたと言ふ訳でもない。余が寂光院じやっこういんの門を潜くぐつて得た情緒じようしよは、浮世を歩む年齢が逆行して父母未生ふもみしよう以前さかのぼに溯さかつたと思ふくらい、古い、物もの寂のさびた、憐れの多い、捕えるほど確しかとした痕跡こんせきもなきまで、淡く消極的な情緒である。この情緒は敷やぶを後うしろにすつくりと立つた女の上に、余の眼そそが注そそがれた時に毫ごうも矛盾の感を与えなかつたの

みならず、落葉の中に振り返る姿を眺めた瞬間において、かえつて一層の深きを加えた。古伽藍ふるがらんと剥げた額は、化銀杏ばけいちようと動かぬ松、錯落さくらくと列ならぶ石塔——死したる人の名を彫きざむ死したる石塔と、花のような佳人とが融和して一団の氣と流れて円熟無礙むげの一種の感動を余の神経に伝えたのである。

こんな無理を聞かせられる読者は定めて承知すまい。これは文士の嘘きよげん言だと笑う者さえあろう。しかし事實はうそでも事實である。文士だろうが不文士だろうが書いた事は書いた通り懸価かけねのないところをかけたのである。もし文士がわるければ断ことわつて置く。余は文士ではない、西片町にしかたまちに住む学者だ。もし疑うならこの問題をとつて学者的に説明してやろう。読者は沙翁さおうの悲劇マクベス

を知っているだろう。マクベス夫婦が共謀して主君のダンカンを
寢室の中で殺す。殺してしまうや否や門いなの戸を続けざま様にたた敲くもの
がある。すると門番が敲くは敲くはと云いながら出て来て酔漢の
管くだを捲まくようなたわいもない事を呂律ろれつの廻らぬ調子で述べ立てる。
これが対照だ。対照も対照も一通りの対照ではない。人殺しの傍わき
で都々逸どどいつを歌うくらいの対照だ。ところが妙な事はこの滑稽こっけいを
挿はさんだために今までの凄せい愴そうたる光景が多少和やわらげられて、ここ
に至って一段とくつろぎがついた感じもなければ、また滑稽が事
件の排列の具合から平生より一倍のおかしみを与えると云う訳で
もない。それでは何らの功果こうかもないかと云うと大変ある。劇全体
を通じての物凄ものすごさ、怖おそろしさはこの一段の諧かいぎ諷やくのため白熱

度に引き上げらるるのである。なお拡大して云えばこの場合においてには諧謔その物が畏怖いふである。恐懼きようくである、悚然しやうぜんとして粟あわはだえを肌あわはだえに吹く要素になる。その訳を云えば先まずこうだ。

吾人が事物に対する観察点が従来の経験で支配せらるるのは言げんを待たずして明瞭な事実である。経験の勢力は度数と、単独な場合を受けた感動の量よに因よつて高下増減するのも争われぬ事実であろう。絹布きぬふとん団だんに生れ落ちて御意ぎよいだ仰せだと持ち上げられる経験がたび重かさなると人間は余に頭を下げるために生れたのじやなと御意よい遊あそばすようになる。金で酒を買い、金で妾めかけを買い、金で邸宅、朋友ほうゆう、従五位じゆごいまで買った連れんじゆう中ちゆうは金さえあれば何でも出来るさと金庫を横目に睨にらんで高たかを括くくつた鼻先こくうはるを虚空遥そかに反かり返かえす。

一度の経験でも御多分には洩れん。箔屋町の大火事に身代を潰した旦那は板橋の一つ半でも蒼くなるかも知れない。濃尾の震災に瓦の中から掘り出された生き仏はドンが鳴つても念仏を唱えるだろう。正直な者が生涯に一返万引を働いても疑を掛ける知人もないし、冗談を商売にする男が十年に半日真面目な事件を担ぎ込んでも誰も相手にするものはない。つまるところ吾々の観察点と云うものは従来の惰性で解決せられるのである。吾々の生活は千差万別であるから、吾々の惰性も商売により職業により、年齢により、気質により、両性によりて各異なるであろう。がその通り。劇を見るときにも小説を読むときにも全篇を通じた調子があつて、この調子が読者、観客の心に反応するとやはり一

種の惰性になる。もしこの惰性を構成する分子が猛烈であればあるほど、惰性その物も牢ろうとして動かすべからず抜くべからざる傾向を生ずるにきまつている。マクベスは妖婆ようば、毒婦、兇きよう漢うかんの行為動作を刻意こくいに描写した悲劇である。読んで冒頭より門番の滑稽つげいに至つて冥々めいめいの際読者の心に生ずる唯一の惰性は怖ふと云う一字に帰着してしまふ。過去がすでに怖ふである、未来もまた怖ふなるべしとの予期は、自然と己おのれを放射して次に出現すべきいかなる出来事をもこの怖ふに関連して解釈しようとして試みるのは当然の事と云わねばならぬ。船に酔つたものが陸おかに上あがつた後あとまでも大地を動くものと思ひ、臆病おそ病に生れつゝいた雀すずめが案山かがし子を例の爺じいさんかと疑うごとく、マクベスを読む者もまた怖ふの一字をどこまでも引張

つて、怖を冠すべからざる辺にまで持つて行こうと力むるは怪しむに足らぬ。何事をも怖化せんとあせる矢先に現わるる門番の狂言は、普通の狂言諧謔とは受け取れまい。

世間には諷語と云うがある。諷語は皆表裏二面の意義を有している。先生を馬鹿の別号に用い、大将を匹夫の渾名に使うのは誰も心得ていよう。この筆法で行くと人に謙遜するのはますます人を愚にした待遇法で、他を称揚するのは熾に他を罵倒した事になる。表面の意味が強ければ強いほど、裏側の含蓄もようやく深くなる。御辞儀一つで人を愚弄するよりは、履物を揃えて人を揶揄する方が深刻ではないか。この心理を一步開拓して考えて見る。吾々が使用する大抵の命題は反対の意味に解釈が出来る事

となろう。さあどつちの意味にしたものだろうと云うときに例の
 惰性が出て苦もなく判断してくれる。滑稽の解釈においてもその
 通りと思う。滑稽の裏には真面目まじめがくつついてる。大笑たいしょうの
 奥には熱涙が潜ひそんでいる。雑談じようだんの底には啾々しゅうしゅうたる鬼哭きこくが
 聞える。とすれば怖と云う惰性を養成した眼をもつて門番の諧謔
 を読む者は、その諧謔を正面から解釈したものであるとか、裏側
 から観察したものであるとか。裏面から観察するとすれば酔漢の
 妄語もうごのうちこに身の毛もよだつほどの畏懼いこの念はあるはずだ。元来
 諷語ふうごは正語せいごよりも皮肉なるだけ正語よりも深刻で猛烈なものであ
 る。虫さえ厭いとう美人の根性こんじようを透見とうけんして、毒蛇の化身けしんすなわ
 ちこれ天女てんによなりと判断し得たる刹那せつなに、その罪悪は同程度の他

の罪悪よりも一層怖るべき感じを引き起す。全く人間の諷語であるからだ。白昼の化物の方が定石の幽霊よりも或る場合には恐ろしい。諷語であるからだ。廃寺に一夜をあかした時、庭前の一本杉の下でカツポレを躍るものがあつたらこのカツポレは非常に物凄かるう。これも一種の諷語であるからだ。マクベスの門番は山寺のカツポレと全然同格である。マクベスの門番が解けたら寂光院の美人も解けるはずだ。

百花の王をもつて許す牡丹さえ崩れるときは、富貴の色もただ好事家の憐れをかうに足らぬほど脆いものだ。美人薄命と云う諺もあるくらいだからこの女の寿命も容易に保険はつけられない。しかし妙齡の娘は概して活気に充ちている。前途の希望に照らさ

れて、見るからに陽気な心持のするものだ。のみならず友染と
 か、繻珍とか、ぱつとした色気のものに包まっているから、横
 から見ても縦から見ても派出である立派である、春景色である。
 その一人が——最も美しくしきその一人が寂光院の墓場の中に立つ
 た。浮かない、古臭い、沈静な四顧の景物の中に立った。すると
 その愛らしき眼、そのはなやかな袖が忽然と本来の面目を變じ
 て蕭条たる周圍に流れ込んで、境内寂寞の感を一層深か
 らしめた。天下に墓ほど落ついたものはない。しかしこの女が墓
 の前に延び上がった時は墓よりも落ちついていた。銀杏の黄
 葉は淋しい。まして化けるとあるからなお淋しい。しかしこの
 女が化銀杏の下に横顔を向けて佇んだときは、銀杏の精が幹か

ら抜け出したと思われくらい淋しかった。上野の音楽会でなければ釣り合わぬ服装をして、帝国ホテルの夜会にでも招待されようなこの女が、なぜかくのごとく四辺の光景と映えいたい帯たいして索さく寞ぼくの觀かんを添そえるのか。これも諷ふう語ごだからだ。マクベスの門番かどわらひが怖おそければ寂光院のこの女も淋しくなくてはならん。

御墓を見ると花筒に菊がさしてある。垣根に咲く豆菊の色は白いものばかりである。これも今の女のせいに相違ない。家うちから折おつて来たものか、途中で買かつて来たものか分らん。もしや名刺めいしでも括くりつけてはないかと葉裏はらまで覗のぞいて見たが何も無い。全体何物ものだろう。余は高等学校時代から浩さんとは親しい付き合いの人であった。うちへはよく泊りに行って浩さんの親類は大抵知っ

ている。しかし指を折ってあれこれと順々に勘定して見ても、こんな女は思い出せない。すると他人が知らん。浩さんは人好きのする性質で、交際もだいぶ広がったが、女に朋友がある事はついに聞いた事がない。もつとも交際をしたからと云つて、必らず余に告げるとは限つておらん。が浩さんはそんな事を隠すような性質ではないし、よしほかの人に隠したからと云つて余に隠す事はないはずだ。こう云うとおかしいが余は河上家の内情は相続人たる浩さんに劣らんくらい精くわしく知つてゐる。そうしてそれは皆浩さんが余に話したのである。だから女との交際だつて、もし実際あつたとすればとくに余に告げるに相違ない。告げぬところをもつて見ると知らぬ女だ。しかし知らぬ女が花まで提さげて浩さんの

墓参りにくる訳がない。これは怪しい。少し変だが追懸おいかけて名前だけでも聞いて見みようか、それも妙だ。いつその事黙もくつて後あとを付けて行く先を見届けようか、それではまるで探偵だ。そんな下等な事はしたくない。どうしたら善よかろうと墓の前で考えた。浩さんは去年の十一月塹壕ざんげうに飛び込んだぎり、今日きょうまで上あがって来ない。河上家代々の墓を杖つえで敲たたいても、手で揺ゆり動かしても浩さんはやはり塹壕ざんげうの底ねに寝ねているだろう。こんな美人が、こんな美しい花を提さげて御詣おまいりに来るのも知らずに寝ねているだろう。だから浩さんはあの女の素す性じょうも名前も聞く必要もあるまい。浩さんが聞く必要もないものを余が探究する必要はなおさらない。いやこれはいかぬ。こう云う論理ではあの女の身元を調べてはならん

と云う事になる。しかしそれは間違っている。なぜ？ なぜは追
つて考えてから説明するとして、ただ今の場合は是非共聞き糺たださな
くてはならん。何でも蚊かでも聞かないと気が済まん。いきなり石
段を一段ひとまたに飛び下りて化銀杏ばけいちようの落葉を蹴散けちらして寂光院の門
を出て先まず左の方を見た。いない。右を向いた。右にも見えない。
足早に四つ角まで来て目の届く限り東西南北を見渡した。やはり
見えない。とうとう取り逃がした。仕方がない、御母おつかさんに逢つ
て話をして見みよう、ことによつたら容子ようすが分るかも知れない。

六畳の座敷は南みなみむき向むきで、拭き込んだ椽えんがわ側の端はじに神代杉じんだいすぎの手拭てぬぐい懸かけが置いてある。軒のき下したから丸い手水桶ちようずおけを鉄くさりの鎖くさりで釣つりしたの洒落しやれているが、その下に一ひとむら叢むらの木賊とくさをあしらった所が一段おもむきの趣おもむきを添そえる。四つ目垣よもぎの向むきうは二三十坪ちやばたけの茶ちや畠ばたけでその間に梅うめの木が三四本見える。垣かきに結ゆうた竹たけの先に洗濯せんたくした白足しろあし袋たびが裏返うらかへしに乾ほしてあつてその隣となりには如露じよろが逆さかさまに被かぶせてある。その根元ねもとに豆菊まめぎくが塊かたまつて咲さいて累るい々るいと白はくぎ玉よくを綴つづつているのを見て「奇麗きれいですな」と御母おんぼさんに話わしかけた。

「今年あつは暖あつたかだもんですからよく持ちます。あれもあなた、浩一こういちの大好きだいすきな菊きくで……」

「へえ、白いのが好きすきでしたかな」

「白い、小さい豆のようなのが一番面白いと申して自分で根を貰つて来て、わざわざ植えたので御座います」

「なるほどそんな事がありましたな」と云つたが、内心は少々氣味が悪かつた。寂光院じやくこういんの花筒はさに挿はさんであるのは正にこの種のこの色の菊である。

「御叔母おぼさん近頃は御寺参りをなさいますか」

「いえ、せんだつて中じゆうから風邪かぜの氣味で五六日伏せつておりましたものですから、ついつい仏へ無沙汰を致しまして。——うちにおつても忘れる間まはないのですけれども——年をとりますと、御湯に行くのも退儀たいぎになりましたね」

「時々は少し表をあるく方が薬ですよ。近頃はいい時候ですから

……」

「御親切にありがとうございます。存じます。親戚のものなども心配して色々云つてくれますが、どうもあなた何なにぶん分ぶん元気がないものですから、それにこんな婆さんを態々わざわざ連れてあるいてくれるものもありませず」

こうなると余はいつでも言句に窮する。どう云つて切り抜けていいか見当がつかない。仕方がないから「はああ」と長く引つ張つたが、御母おつかさんは少々不平の気味である。さあしまったと思つたが別に片附しじゅうからけようもないから、梅の木をあちらこちら飛び歩ないでいる四十雀なを眺めていた。御母さんも話の腰を折られて無言である。

「御親類の若い御嬢さんでもあると、こんな時には御相手にいいですがね」と云いながら不調法なる余にしては天晴な出来だと自分で感心して見せた。

「生憎あいにくそんな娘もおりませず。それに人の子にはやはり遠慮勝ちで……せがれに嫁でも貰つて置いたら、こんな時にはさぞ心丈夫だろうと思ひます。ほんに残念な事をしました」

そら娶よめが出た。くるたびによめが出ない事はない。年頃の息子に嫁を持たせたいと云うのは親の情じやうとしてさもあるべき事だが、死んだ子に娶を迎えて置かなかつたのを残念がるのは少々平ひよう仄そくが合わない。人情はこんなものか知らん。まだ年寄になつて見ないから分らないがどうも一般の常識から云うと少し間違つて

いるようだ。それは一人で侘^{わび}しく暮らすより氣に入つた嫁の世話になる方が誰だつて頼^{たよ}りが多かるう。しかし嫁の身になつても見るがいい。結婚して半^{はん}年^{とし}も立たないうちに夫^{おつと}は出征する。ようやく戦争が済んだと思うと、いつの間^まにか戦死している。二十^{はたち}を越すか越さないのに、姑^{しゅうと}と二人暮しで一生を終る。こんな残酷な事があるものか。御母さんの云うところは老人の立場から云えば無理もない訴^{うったえ}だが、しかし随分我^{わが}儘^{まま}な願だ。年寄はこれだからいかぬと、内心はすこぶる不平であつたが、滅^{めつた}多^たな抗議を申し込むとまた氣^き色^{しよく}を悪^{わる}くさせる危険がある。せつかく慰めに來ていつも失策をやるのは余り器量のない話だ。まあまあだまつているに若^しくはなしと覺悟をきめて、反^{かえ}つて反對の方角へと楯^{かじ}をとつ

た。余は正直に生れた男である。しかし社会に存在して怨うらまれず
に世の中を渡ろうとすると、どうも嘘うそがつきたくなる。正直と社
会生活が両立するに至れば嘘は直ちにやめるつもりでいる。

「實際残念な事をしましたね。全体浩さんはなぜ嫁をもらわなか
ったんですか」

「いえ、あなた色々探しておりますうちに、旅順へ参るようにな
ったもので御座んすから」

「それじゃ当人も貰うつもりでいたんでしよう」

「それは……」と云ったが、それぎり黙っている。少々様子が変
だ。あるいは寂光院事件の手懸てがかりが潜伏していそうだ。白状して
云うと、余はその時浩さんの事も、御母さんの事も考えていなか

った。ただあの不思議な女の素性すじょうと浩さんとの関係が知りた
 いので頭の中はいつぱいになっている。この日における余は平生の
 ような同情的動物ではない。全く冷静な好奇こうき獣とも称すべき代
 ろもの物に化していた。人間もその日その日で色々になる。悪人にな
 った翌日は善男に変じ、小人の昼のちの後に君子の夜がくる。あの男
 の性格はなどと手にとったように吹聴ふいちようする先生があるがあれ
 は利口の馬鹿と云うものでその日その日の自己を研究する能力さ
 えないから、こんな傍若無ぼうじやくぶじん人の囁語げいごを吐いて独りひとで恐悦きようえつ
 がるのである。探偵ほど劣等な家業はまたとあるまいと自分にも
 思い、人にも宣言して憚はばからなかつた自分が、純然たる探偵的態
 度をもって事物に対するに至つたのは、すこぶるあきれ返つた現

象である。ちよつと言ひ淀よどんだ御母おつかさんは、思い切つた口調で

「その事について浩一は何かあなたに御話をした事は御座いませんか」

「嫁の事ですか」

「ええ、誰か自分の好いたものがあるような事を」

「いいえ」と答えたが、実はこの問こそ、こつちから御母さんに向つて聞いて見なければならん問題であつた。

「御叔母おぼさんには何か話しましたろう」

「いいえ」

望の綱はこれぎり切れた。仕方がないからまた眼を庭の方へ転ずると、四十雀しじゆうからはすでにどこかへ飛び去つて、例の白菊の色が、

水気みずけを含んだ黒土に映じて見事に見える。その時ふと思い出したのは先日さきの日記の事である。御母さんも知らず、余も知らぬ、あの女の事があるいは書いてあるかも知れぬ。よしあからさまに記してなくても一応目を通したら何か手懸てがかりがあるろう。御母さんは女の事だから理解出来んかも知れんが、余が見ればこうだろいうくらしいの見当はつくわけだ。これは催さい促そくして日記を見るに若しくはない。

「あの先日御話しの日記ですね。あの中に何かかいてはありませんか」

「ええ、あれを見ないうちは何とも思わなかったのですが、つい見たものですから……」と御母さんは急に涙声になる。また泣か

した。これだから困る。困りはしたものの、何か書いてある事はたしかだ。こうなつては泣こうが泣くまいがそんな事は構つておられん。

「日記に何か書いてありますか？　それは是非拝見しましょう」と勢よく云つたのは今から考えて赤面の次第である。御母さんは起つて奥へ這入る。

やがて襖をふすまあけてポケット入れの手帳を持つて出てくる。表紙は茶の革でちよつと見ると紙入のような体裁である。朝夕内うちがくしに入れたものと見えて茶色の所が黒ずんで、手垢てあかでぴかぴか光っている。無言のまま日記を受取つて中を見みようとする。表の戸がからからと開いて、頼みますと云う声がする。生憎あいにく来客だ。

御母さんは手真似てまねで早く隠せと云うから、余は手帳を内懐うちぶところに入れて「宅へ帰つてもいいですか」と聞いた。御母さんは玄関の方を見ながら「どうぞ」と答える。やがて下女が何とかさまが入らつしやいましたと注進にくる。何とかさまに用はない。日記さえあれば大丈夫早く帰つて読まなくつてはならない。それではと挨拶をして久堅町ひさかたまちの往来おうらいへ出る。

伝通院でんずういんの裏を抜けて表町の坂を下りながら路々考えた。どうしても小説だ。ただ小説に近いただけ何だか不自然である。しかしこれから事件の真相まことを究めて、全体の成行が明瞭めいりょうになりさえすればこの不自然おのも自ずと消滅する訳だ。とにかく面白い。是非探索——探索と云うと何だか不愉快だ——探究として置こう。是

非探究して見なければならん。それにしても昨日きのうあの女のあとを
付けなかつたのは残念だ。もし向後こうごあの女に逢う事が出来ない
するとこの事件は判然はんぜんと分りそうにもない。入らぬ遠慮をして
流りゅう星せい光こう底ていじゃないが逃がしたのは惜しい事だ。元来品位を重
んじ過ぎたり、あまり高尚にすると、得えてこんな事になるものだ。
人間はどこかに泥棒的分子がないと成功はしない。紳士も結構に
は相違ないが、紳士の体面ていめんを傷きずけざる範囲はんいにおいて泥棒根性を
発揮せんとせつかくの紳士が紳士として通用しなくなる。泥棒氣
のない純粹の紳士は大抵行き倒れになるそうだ。よしこれからは
もう少し下品になってやろう。とくだらぬ事を考えながら柳町の
橋の上まで来ると、水道橋の方から一輛りょうの人力車が勇ましく白はく

山の方へ馳^かけ抜ける。車が自分の前を通り過ぎる時間は何秒と云うわずかの間^{あいだ}であるから、余が冥^{めい}想^{そう}の眼をふとあげて車の上を見た時は、乗っている客はすでに眼界から消えかかっていた。がその人の顔は？ ああ寂光院だと気が着いた頃はもう五六間先へ行っている。ここだ下品になるのはここだ。何でも構わんから追い懸けると、下駄の齒をそちらに向けたが、徒歩で車のあとを追ひ懸けるのは余り下品すぎる。氣^{きちが}狂^{がい}でなくってはそんな馬鹿な事をするものはない。車、車、車はおらんかなと四方を見廻したが生^{あいに}憎^{にく}一輛もおらん。そのうちに寂光院は姿も見えないくらい遥^{はる}かあなたに馳^かけ抜ける。もう駄目だ。氣狂と思われるまで下品にならなければ世の中は成功せんものかなと惘^{ぼう}然^{ぜん}として西片

町へ歸つて来た。

とりあえず、書齋に立て籠こもつて懷中から例の手帳を出したが、何分夕景ゆうけいではつきりせん。実は途上でもあちこちと拾い読みに読んで来たのだが、鉛筆でなぐりがきに書いたものだから明るい所でも容易に分らない。ランプを点つける。下女が御飯はと云つて来たから、めしは後あとで食うと追り返す。さて一頁ページから順々に見て行くと皆陣中の出来事のみである。しかも倅こそう惣そうの際ふんいんに分陰ぶんいんを偷ぬすんで記しつけたものと見えて大概の事は一句二句で弁じている。「風、坑道内にて食事。握り飯二個。泥まぶれ」と云うのがある。「夜来風邪ふうじゃの気味、発熱。診察を受けず、例のごとく勤務」と云うのがある。「テント外の歩哨ほしやう散弾あたに中る。テントに仆たおれかか

る。血痕けつこんを印す」「五時大突撃。中隊全滅、不成功に終る。残念※」残念の下に！が三本引いてある。無論記憶を助けるための手控てびかえであるから、毫ごうも文章らしいところはない。字句を修飾したり、彫琢ちようたくしたりした痕跡は薬にしたくも見当らぬ。しかしそれが非常に面白い。ただありのままをありのままに写しているところが大おおに氣に入いった。ことに俗人の使用する壮士的口吻くふんがないのが嬉しい。怒氣天を衝つくだの、暴慢なる露人ろじんだの、醜しゆうりよ虜りよの胆たんを寒からしむだの、すべてえらそうで安やすっぽい辞句はどこにも使つかってない。文体ははなはだ氣に入いった、さすがに浩さんだと感心したが、肝心かんじんの寂光院事件はまだ出て来ない。だんだん読んで行くうちに四行ばかり書いて上から棒を引いて消した所が出

て来た。こんな所が怪しいものだ。これを読みこなさなければ気が済まん。手帳をランプのホヤに押しつけて透かして見る。二行目の棒の下からある字が三分の二ばかり食み出している。郵の字らしい。それから骨を折ってようよう郵便局の三字だけ片づけた。郵便局の上の字は大※だけ見えている。これは何だろうと三分ほどランプと相談をしてやっと分った。本郷郵便局である。ここまではようやく漕ぎつけたがそのほかは裏から見ても逆さまに見てもどうしても読めない。とうとう断念する。それから二三頁進むと突然一大発見に遭遇した。「二三日一睡もせんので勤務中坑内仮寝。郵便局で逢った女の夢を見る」

余は覚えずどきりとした。「ただ二三分の間、顔を見たばかり

の女を、ほど経て夢に見るのは不思議である」この句から急に言文一致になっている。「よほど衰弱している証拠であろう、しかし衰弱せんでもあの女の夢なら見るかも知れん。旅順へ来てからこれで三度見た」

余は日記をびしやりと敲たたいてこれだ！ と叫んだ。御母おつかさんが嫁々と口癖のように云うのは無理はない。これを読んでいるからだ。それを知らずに我わがまま儘だの残酷だのと心中で評したのは、こつちが悪わるいのだ。なるほどこんな女がいるなら、親の身として一日でも添わしてやりたいだろう。御母さんが嫁がいたらいと云うのを今まで誤解して全く自分の淋しいのをまぎらすためとばかり解釈していたのは余の眼識の足らなかつたところだ。あれ

は自分の我儘で云う言葉ではない。可愛い息子を戦死する前に、半月でも思い通りにさせてやりたかつたと云う謎なぞなのだ。なるほど男は呑気のんきなものだ。しかし知らん事なら仕方がない。それは先まずよしとして元来 寂じゃつ光院こういんがこの女なのか、あるいはあれは全く別物で、浩さんの郵便局で逢つたと云うのはほかの女なのか、これが疑問である。この疑問はまだ断定出来ない。これだけの材料でそう早く結論に高飛びはやりかねる。やりかねるが少しは想像を容いれる余地もなくしては、すべての判断はやれるものではない。浩さんが郵便局あの女に逢つたとする。郵便局へ遊びに行く訳はないから、切手を買うか、為替かわせを出すか取るかしたに相違ない。浩さんが切手を手紙へ貼はる時に傍そばにいたあの女が、どう云う拍ひょう

子かで差出人の宿所姓名を見ないとは限らない。あの女が浩さ

んの宿所姓名をその時に覚え込んだとして、これに小説的分子を五分ぶばかり加味すれば寂光院事件は全く起らんとも云えぬ。女の方はそれで解かいせたとして浩さんの方が不思議だ。どうしてちよつと逢つたものをそう何度も夢に見るかしらん。どうも今少ししたしかな土台が欲しいがとなお読んで行くと、こんな事が書いてある。「近世の軍略において、攻城は至難なるものの一として数えらる。我が攻囲軍の死傷多きは怪しむに足らず。この二三ヶ月間に余が知れる将校の城下に斃たおれたる者は枚まい挙きよに違いとまあらず。死は早晚余を襲い来らん。余は日夜に両軍の砲撃を聞きて、今か今かと順番の至るを待つ」なるほど死を決していたものと見える。十一月二

十五日の条にはこうある。「余の運命もいよいよ明日に逼せまった」
今度は言文一致である。「軍人が軍いくさで死ぬのは当然の事である。
死ぬのは名誉である。ある点から云えば生きて本国に帰るのは死
ぬべきところを死に損そくなつたようなものだ」戦死の当日の所を見
ると「今日限りの命だ。二竜山を崩くずす大砲の音がしきりに響く。
死んだらあの音も聞えぬだろう。耳は聞えなくなつても、誰か来
て墓参りをしてくれるだろう。そうして白い小さい菊でもあげて
くれるだろう。寂光院は閑静な所だ」とある。その次に「強い風
だ。いよいよこれから死に行く。丸たまに中あたつて仆たおれるまで旗を振
つて進むつもりだ。御母おつかさんは、寒いだろう」日記はここで、ぶ
つりと切れている。切れているはずだ。

余はぞつとして日記を閉じたが、いよいよあの女の事が気に懸かつてたまらない。あの車は白山の方へ向いて馳かけて行つたから、何でも白山方面のものに相違ない。白山方面とすれば本郷の郵便局へ来んとも限らん。しかし白山だつて広い。名前も分らんものを探たずねて歩いたつて、そう急に知れる訳がない。とにかく今夜の間に合うような簡略な問題ではない。仕方がないから晩ばんめし食を済ましてその晩はそれぎり寝る事にした。実は書物を読んでも何が書いてあるか茫ぼうぼう々として海に対するような感があるから、やむをえず床へ這入はいつたのだが、さて夜具の中でも思う通りにはならんもので、終夜安眠が出来なかつた。

翌日学校へ出て平常の通り講義はしたが、例の事件が気になつ

ていつものように授業に身が入らない。控所へ来ても他の職員と話しをする気にならん。学校の退けるのを待ちかねて、その足で寂光院へ来て見たが、女の姿は見えない。昨日の菊が鮮やかに竹藪の緑に映じて雪の団子のように見えるばかりだ。それから白山から原町、林町の辺をぐるぐる廻つて歩いたがやはり何らの手懸りもない。その晩は疲労のため寝る事だけはよく寝た。しかし朝になつて授業が面白く出来ないのは昨日と変る事はなかつた。三日目に教員の一人を捕まえて君白山方面に美人がいるかなと尋ねて見たら、うむ沢山いる、あつちへ引越したまえと云つた。帰りがけに学生の一人に追いついて君は白山の方にいるかと聞いたら、いいえ森川町ですと答えた。こんな馬鹿な騒ぎ方をしていた

つて始まる訳のものではない。やはり平生のごとく落ちついて、緩^{ゆる}りと探究するに若^しくなしと決心を定めた。それでその晩は煩^{わづ}悶^{もん}焦慮もせず、例の通り静かに書齋に入つて、せんだつて中^{じゆう}からの取調物を引き続いてやる事にした。

近頃余の調べている事項は遺伝と云う大問題である。元来余は医者でもない、生物学者でもない。だから遺伝と云う問題に関して専門上の智識は無^れ論有^りしておらぬ。有^りしておらぬところが余の好奇心を挑^{ちよう}撥^{はつ}する訳で、近頃ふとした事からこの問題に関してその起原発達の歴史やら最近の学説やらを一通り承知したいと云う希望を起して、それからこの研究を始めたのである。遺伝と一口に云うとすこぶる単純なようであるがだんだん調べて見ると

複雑な問題で、これだけ研究していても充分しょうがい生せい涯がいの仕事はあ
る。メンデルズムだの、ワイスマンの理論だの、ヘッケルの議論
だの、その弟子のヘルトウイツヒの研究だの、スペンサーの進化
心理説だのと色々の人が色々の事を云うている。そこで今夜は例
のごとく書齋の裡うちで近頃出版になった英吉利イギリスのリードと云う人の
著述を読むつもりで、二三枚だけは何気なくはぐつてしまった。
するとどう云う拍ひょうし子か、かの日記の中の事柄が、書物を読ませ
まいと頭の中へ割り込んでくる。そうはさせぬとまた一枚ほど開あ
けると、今度は寂光院が襲つて来る。ようやくそれを追払つて五
六枚無難に通過したかと思うと、御母おつかさんの切り下げの被布ひふ姿が
ページの面にあらわれる。読むつもりで決心して懸かかった仕事だか

ら読めん事はない。読めん事はないがページとページの間に狂言が這^{はい}入る。それでも構わずどしどし進んで行くと、この狂言と本文の間が次第次第に接近して来る。しまいにはどこからが狂言でどこまでが本文か分らないようにぼうつとして来た。この夢のようなありさまで五六分続けたと思ううち、たちまち頭の中に電流を通じた感じがしてはつと我に帰った。「そうだ、この問題は遺伝で解ける問題だ。遺伝で解けばきつと解ける」とは同時に吾口を突いて飛び出した言語である。今まではただ不思議である小説的である。何となく落ちつかない、何か疑惑を晴らす工夫はあるまいか、それには当人を捕えて聞き糺^{ただ}すよりほかに方法はあるまいとのみ速断して、その結果は朋友に冷かされたり、屑屋流^{くずや}に駒

込近傍を徘徊はいかいしたのである。しかしこんな問題は当人の支配権以外に立つ問題だから、よし当人を尋ねあてて事実を明らかにしたところで不思議は解けるものでない。当人から聞き得る事実その物が不思議である以上は余の疑惑は落ちつきようがない。昔はこんな現象を因果いんがと称となえていた。因果は諦あきらめる者、泣く子と地頭には勝たれぬ者と相場がきまつていた。なるほど因果いんがと言いい放はなてば因果で済むかも知れない。しかし二十世紀の文明はこの因いんを極きわめなければ承知しない。しかもこんな芝居的夢幻的現象の因いんを極きわめるのは遺伝によるよりほかにしようはなからうと思う。本来ならあの女を捕つかまえて日記中の女と同人か別物かを明あきらにした上で遺伝の研究を初めるのが順当であるが、本人の居所きょじょさえたしかな

らぬただいまでは、この順序を逆にして、彼らの血統から吟味して、下から上へ溯さかのぼる代りに、昔から今に繰くりさげて来るよりほかに道はあるまい。いずれにしても同じ結果に帰着する訳だから構わない。

そんならどうして兩人の血統を調べたものだろう。女の方は何者だか分らないから、先まず男の方から調べてかかる。浩さんは東京で生れたから東京っ子である。聞くところによれば浩さんの御お父とつさんも江戸で生れて江戸で死んだそうだ。するとこれも江戸っ子である。御お爺じいさんも御お爺とつさんの御お父とつさんも江戸っ子である。すると浩さんの一家は代々東京で暮らしたようであるがその実町人でもなければ幕臣でもない。聞くところによると浩さんの家は紀

州の藩士であつたが江戸詰で代々こちらで暮らしたのだそうだ。紀州の家来と云う事だけ分ればそれで充分手懸りてがかはある。紀州の藩士は何百人あるか知らないが現今東京に出ている者はそんなに沢山あるはずがない。ことにあの女のように立派な服装をしている身分なら藩主の家へ出入りをするにきまつている。藩主の家に出入するとすればその姓名はすぐに分る。これが余の仮定である。もしあの女が浩さんと同藩でないとするるとこの事件は当分埒らちがわからない。抛ほうつて置いて自然天然寂光院に往来で邂逅かいこうするのを待つよりほかに仕方がない。しかし余の仮定が中あたるとすると、あとは大抵余の考え通りに発展して来るに相違ない。余の考によると何でも浩さんの先祖と、あの女の先祖の間に何事かあつて、その

因果でこんな現象を生じたに違いない。これが第二の仮定である。こうこしらえてくるとだんだん面白くなってくる。単に自分の好奇心を満足させるばかりではない。目下研究の学問に対してもつとも興味ある材料を給与するこうけん貢献的事業になる。こう態度が変化すると、精神が急にそうかい爽快になる。今までは犬だか、探偵だかよほど下等なものに零落したような感じで、それがため脳中不愉快の度をだいぶ高めていたが、この仮定から出立すれば正々堂々たる者だ。学問上の研究の領分に属すべき事柄である。少しも疚やましい事はないと思ひ返した。どんな事でも思ひ返すと相当のジヤスチフィケーションはある者だ。悪るかつたと気がついたら黙坐して思ひ返すに限る。

あくる日学校で和歌山県出の同僚某に向つて、君の国に老人で藩の歴史に詳しい人はいないかと尋ねたら、この同僚首をひねつてあるさと云う。因つてその人物を承うけたまわると、もとは家老かろうだつたが今では家令かれいと改名して依然として生きていると何だか妙な事を答える。家令ならなお都合がいい、平常藩邸ふだんしゆつにゆうに出入する人物の姓名職業は無論承知しているに違ない。

「その老人は色々昔の事を記憶しているだろうな」

「うん何でも知っている。維新の時などはだいぶ働いたそうだ。槍やりの名人だね」

槍などは下手へたでも構わん。昔むかし藩中に起つた異聞奇譚いぶんきだんを、老ろうも耄もうせずに覚えていてくれればいいのである。だまつて聞いてい

ると話が横道へそれそうだ。

「まだ家令を務めてつといるくらいなら記憶はたしかだろうな」

「たしか過ぎて困るね。屋敷のものがみんな弱っている。もう八十近いのだが、人間も随分丈夫に製造する事が出来るもんだね。

当人に聞くと全くそうじゆつ槍術の御蔭だと云つてる。それで毎朝起きるが早いか槍をしごくんだ……」

「槍はいいが、その老人に紹介して貰えまいか」

「いつでもして上げる」と云うと傍そばに聞いていた同僚が、君は白山の美人を探さがしたり、記憶のいい爺さんを探したり、随分多忙だねと笑った。こつちはそれどころではない。この老人に逢いさえすれば、自分の鑑定が中あたるか外はずれるか大抵の見当がつく。一刻

も早く面会しなければならん。同僚から手紙で先方の都合を聞き合せてもらおう事にする。

二三日は何の音沙汰もなく過ぎたが、御面会をするからみように明にさんち

日ち 三時頃来て貰いたいと云う返事がようやくの事来たよと同僚が告げてくれた時は大に嬉おおいうれしかった。その晩は勝手次第に色々と事件の発展を予想して見て、先まず七分までは思い通りの事実が暗中から白日の下もとに引き出されるだろうと考えた。そう考えるにつけて、余のこの事件に対する行動が——行動と云わんよりむしろ思いつきが、なかなか巧みである、無学なものならとうていこんな点に考えの及ぶきつ氣遣かいはない、学問のあるものでも才氣のない人にはこのような働きのある応用が出来ると、寝ながら

大得意であつた。ダーウインが進化論を公けにした時も、ハミルトンがクォーターニオンを発明した時も、大方おおかたこんなものだろうと、ひとりひとでいい加減にきめて見る。自宅うちの渋柿は八百屋やおやから買った林檎りんごより旨うまいものだ。

翌あくるひ日は学校が午ひるぎりだから例刻を待ちかねて麻布あざぶまで車代二

十五銭を奮発して老人に逢つて見る。老人の名前はわざと云わな

い。見るからに頑がんじょう丈じょうな爺ぢやうさんだ。白い髯ひげを細長く垂れて、黒

紋付はちおうじひらに八王子平で控えている。「やあ、あなたが、何の御友達

で」と同僚の名を云う。まるで小供扱だ。これから大発明をして

学界に貢献しようと言ふ余に対してはやや横柄おうへいである。今から

考へて見ると先方が横柄おうへいなのではない、こつちの氣位きぐらいが高過ぎ

たから普通の応接ぶりが横柄に見えたのかも知れない。

それから二三件世間なみの応答を済まして、いよいよ本題に入つた。

「妙な事を伺いますが、もと御藩ごはんに河上と云うのが御座いましたろう」余は学問はするが応対の辞にはなれておらん。藩はんというのが普通だが先方の事だから尊敬して御藩ごはんと云つて見た。こんな場合いままに何と云うものか未だに分らない。老人はちよつと笑つたようだ。

「河上——河上と云うのはあります。河上才三と云うて留守居を務つとめておつた。その子が貢五郎と云うてやはり江戸詰で——せんだつて旅順で戦死した浩一の親じやて。——あなた浩一の御つき

合いか。それはそれは。いや気の毒な事で——母はまだあるはずじゃが……」と一人で弁ずる

河上いっけ一家の事を聞くつもりなら、わざわざ麻布下りあざぶんだまで出張する必要はない。河上を持ち出したのは河上対某との関係が知りたからである。しかしこの某なるものの姓名が分らんから話しの切り出しようがない。

「その河上について何か面白い御話はないでしょうか」

老人は妙な顔をして余を見詰めていたが、やがて重苦しく口を切った。

「河上？ 河上にも今御話しする通り何人もある。どの河上の事を御尋ねか」

「どの河上でも構わんです」

「面白い事と云うて、どんな事を？」

「どんな事でも構いません。ちと材料が欲しいので」

「材料？ 何になさる」 厄やっかい介かいな爺やうぢさんだ。

「ちと取調べたい事がありました」

「なある。貢五郎と云うのはだいぶ慷慨こうがい家で、維新の時などは

だいぶ暴あばれたものだ——或る時あなた長い刀を提さげてわしの所

へ議論に来て、……」

「いえ、そう云う方面でなく。もう少し家庭内に起つた事柄で、

面白いと今でも人が記憶しているような事件はないでしょうか」

老人は默もく然ねんと考かんえている。

「貢五郎という人の親はどんな性質でしたらう」

「才三かな。これはまた至つて優しい、——あなたの知つておられる浩一に生き写しじや、よく似ている」

「似ていますか？」と余は思わず大きな声を出した。

「ああ、実によく似ている。それでその頃は維新には間まもある事で、世の中も穩おだやかであつたのみならず、役が御留守居だから、だ**いぶ**金を使つて風ふうりゆう流をやつたそうだ」

「その人の事について何か艶えん聞ぶんが——艶聞と云うと妙ですが——ないでしようか」

「いや才三については憐れな話がある。その頃家中に小野田帯刀おのだたてわきと云うて、二百石取りの侍さむらいがいて、ちやうど河上と向い合つて屋

敷を持っておつた。この帯刀に一人の娘があつて、それがまた藩中第一の美人であつたがな、あなた」

「なるほど」うまいだんだん手懸りが出来る。

「それで両家は向う同志だから、朝夕往来をする。往来をする

うちにその娘が才三に懸想けそをする。何でも才三方へ嫁に行かねば

死んでしまうと騒いだのだて——いや女と云うものは始末に行か

ぬもので——是非行かして下されと泣くじや」

「ふん、それで思う通りに行きましたか」成蹟せいせきは良好だ。

「で帯刀から人をもつて才三の親に懸合かけあうと、才三も実は大變貫

いたかつたのだからその旨むねを返事する。結婚の日取りまできめる

くらいに事が埒はかどつたて」

「結構な事だ」と申ししたがこれで結婚をしてくれては少々困ると内心ではひやひやして聞いている。

「そこまでは結構だったが、——飛んだ故障が出来たじゃ」
「へええ」そう来なくつてはと思う。

「その頃くにがろう国家老にやはり才三くらいなとしかつこう年恰好なせがれが有つて、このせがれがまた帯刀の娘にれんぼ恋慕して、是非貰いたいと聞き合せて見るともう才三方へ約束が出来たあとだ。いかに家老の勢でもこればかりはどうもならん。ところがこのせがれが幼少の頃から殿様の御相手をして成長したもので、非常に御上おかみの御氣に入りでの、あなた。——どこをどう運動したものでか殿様の御意ぎよいでその方ほうの娘をあれに遣つかわせと云う御意が帯刀に下おりたのだて」

「気の毒ですな」と云つたが自分の見込が着々あた中るので実に愉快でたまらん。これで見ると朋友の死ぬような凶事でも、自分の予言が的中するのは嬉しいかも知れない。着物を重ねないと風邪かぜを引くぞと忠告をした時に、忠告をされた本人が吾が言を用いないでしかもぴんぴんしていると心持が悪わるい。どうか風邪が引かしてやりたくなる。人間はかようにわがままなものだから、余一人を責めてはいかん。

「実に気の毒な事だて、御上の仰せだから内約があるの何のと申し上げて仕方がない。それで帯刀が娘に因果いんがを含めて、とうとう河上方を破談にしたな。両家が従来を通り向う合せでは、何かにつけて妙でないと云うので、帯刀は国詰になる、河上は江戸に

残ると云う取り計とはからいをわしのおやじがやったのじや。河上が江戸で金を使ったのも全くそんなこんなで残念を晴らすためだろう。それでこの事がな、今だから御話しようなもの、当時はぱつとすると両家の面目かかに関わると云うので、内々にして置いたから、割合に人が知らずにいる」

「その美人の顔は覚えて御出おいでですか」と余に取つてはすこぶる重大な質問をかけて見た。

「覚えているとも、わしもその頃は若かったからな。若い者には美人が一番よく眼につくようだて」と皺しわだらけの顔を皺しわばかりにしてからからと笑った。

「どんな顔ですか」

「どんなと云うて別に形容しようもない。しかし血統と云うは争われんもので、今の小野田の妹がよく似ている。——御存知はな
いかな、やはり大学出だが——工学博士の小野田を」

「白^{はくさん}山の方にいるでしょう」ともう大丈夫と思つたから言い放つて、老人の気色^{けしき}を伺うと

「やはり御承知か、原町にいる。あの娘もまだ嫁に行かんようだが。——御屋敷の御姫様^{おひいさま}の御相手に時々来ます」

占めた占めたこれだけ聞けば充分だ。一から十まで余が鑑定の通りだ。こんな愉快な事はない。寂光院はこの小野田の令嬢に違ない。自分ながらかくまで機敏な才子とは今まで思わなかつた。

余が平生主張する趣味の遺伝と云う理論を証拠立てるに完全な例

が出て来た。ロメオがジュリエットを一目見る、そうしてこの女に相違ないと先祖の経験を数十年の後に認識する。エレーンがランスロットに始めて逢う、この男だぞと思ひ詰める、やはり父母未生以前に受けた記憶と情緒が、長い時間を隔てて脳中に再現する。二十世紀の人間は散文的である。ちよつと見てすぐ惚れるような男女を捕えて輕薄と云う、小説だと云う、そんな馬鹿があるものかと云う。馬鹿でも何でも事實は曲げる訳には行かぬ、逆かさにする訳にもならん。不思議な現象に逢わぬ前ならとにかく、逢うた後にも、そんな事があるものかと冷淡に看過するのは、看過するものの方が馬鹿だ。かように学問的に研究的に調べて見れば、ある程度までは二十世紀を満足せしむるに足るくらいの説

明はつくのである。とここまでは調子づいて考えて来たが、ふと思いついて見ると少し困る事がある。この老人の話しによると、この男は小野田の令嬢も知っている、浩さんの戦死した事も覚えていゝる。するとこの兩人は同藩の縁故でこの屋敷へ平生出入しゅつにゆうして互に顔くらいは見合っているかも知れん。ことによると話をした事があるかも知らん。そうすると余のひょうぼう標 榜する趣味の遺伝と云う新説もその論拠が少々薄弱になる。これは兩人がただ一度本郷の郵便局で出合った事にして置かんと不都合だ。浩さんは徳川家へ出入する話をついにした事がないから大丈夫だろう、ことに日記にああ書いてあるから間違はないはずだ。しかし念のため不用心だから尋ねて置こうと心を定めた。

「ぎつき浩一の名前をおっしやったようですが、浩一は存ぞんじ生しょうち中ゆう御屋敷へよく上がりましたか」

「いいえ、ただ名前だけ聞いているばかりで、——おやじは先せんこ刻く御話をした通り、わしと終夜激論をしたくらいな間柄じゃが、せがれは五六歳のときに見たぎりで——実は貢五郎が早く死んだものだから、屋敷へ出入でいりする機会もそれぎり絶えてしもうて、——その後は頓ごと逢おうた事ありません」

そうだろう、そう来なくつては辻つじ棲まが合わん。第一余の理論の証明に關係してくる。先まずこれなら安心。御蔭様でと挨拶あいさつをして帰りかけると、老人はこんな妙な客は生れて始めてだとも思つたものか、余を送り出して玄関に立つたまま、余が門を出て

振り返るまで見送っていた。

これからの話は端折はしよつて簡略に述べる。余は前にも断わった通り文士ではない。文士ならこれからが大おおに腕前おおいを見せるところだが、余は学問読書を専一にする身分だから、こんな小説めいた事を長々しくかいているひまがない。新橋で軍隊の歓迎を見て、その感慨から浩さんの事を追想して、それから寂光院の不思議な現象に逢つてその現象が学問上から考えて相当の説明がつくと云う道行きが読者の心に合点がてん出来ればこの一篇の主意は済んだのである。実は書き出す時は、あまりの嬉しさに勢い込んで出来るだけ精密に叙述して来たが、慣れぬ事とて余計な叙述をしたり、不用な感想を挿そうにゆう入したり、読み返して見ると自分でもおかしいと

思うくらい精^{くわ}しい。その代りここまで書いて来たらもういやになった。今までの筆法でこれから先を描写するとまた五六十枚もかかねばならん。追々学期試験も近づくし、それに例の遺伝説を研究しなくてはならんから、そんな筆を舞わす時日は無論ない。のみならず、元来が寂^{じゃつこういん}光院事件の説明がこの篇の骨子だから、ようやくの事ここまで筆が運んで来て、もういいと安心したら、急にがっかりして書き続ける元気がなくなつた。

老人と面会をした後^{のち}には事件の順序として小野田と云う工学博士に逢わなければならん。これは困難な事でもない。例の同僚からの紹介を持って行つたら快よく談話をしてくれた。二三度訪問するうちに、何かの機会で博士の妹に逢わせてもらった。妹は余

の推量に違たがわず例の寂光院であつた。妹に逢つた時顔でも赤らめるかと思つたら存外たんぱく淡泊ごうで毫も平生ことと異なる様子のなかつたのはいささか妙な感じがした。ここまではすらすら事が運んで来たが、ただ一つ困難なのは、どうして浩さんの事を言い出したものか、その方法である。無論デリケートな問題であるから滅多めったに聞けるものではない。と云つて聞かなければ何だか物足らない。余一人から云えばすでに学問上の好奇心を満足せしめたる今こんにち日、これ以上立ち入つてくだらぬ詮議せんぎをする必要を認めておらん。けれども御母おつかさんは女だけに底まで知りたいのである。日本は西洋と違つて男女の交際が発達しておらんから、独身の余と未婚のこの妹と対座して話す機会はとてもない。よし有つたとしたところ

で、むやみに切り出せばいたずらに処女を赤面させるか、あるいは知りませぬと跳ねつけられるまでの事である。と云つて兄のいる前ではなおさら言いにくい。言いにくいと申すより言うを敢てすべからざる事かも知れない。墓参り事件を博士が知つていなければただけれど、もし知らんとすれば、余は好んで人の秘事を暴露する不作法を働いた事になる。こうなるといくら遺伝学を振り廻しても埒はあかん。自ら才子だと飛び廻つて得意がった余も茲に至つて大に進退に窮した。とどのつまり事情を逐一打ち明けて御母さんに相談した。ところが女はなかなか智慧がある。

御母さんの仰せには「近頃一人の息子を旅順で亡くして朝、夕淋しがって暮らしている女がいる。慰めてやろうと思つても男で

はうまく行かんから、おひまな時に御嬢さんを時々遊びにやっ
上げて下さいとあなたから博士に頼んで見て頂きたい」とある。
早速博士方へまかり出て鸚鵡的おうむ口吻こうふんを弄ろうして旨むねを伝えると博士
は一も二もなく承諾してくれた。これが元で御母さんおつかと御嬢さん
とは時々会見をする。会見をするたびに仲がよくなる。いつしよ
に散歩をする、御饌ごぜんをたべる、まるで御嫁さんのようになった。
とうとう御母さんが浩さんの日記を出して見せた。その時に御嬢
さんが何と云ったかと思つたら、それだから私は御寺参おてらまいりをして
おりましたと答えたそうだ。なぜ白菊を御墓へ手向けたむけたのかと問
い返したら、白菊が一番好きだからと云う挨拶であつた。

余は色の黒い将軍を見た。婆さんがぶら下がる軍曹を見た。ワ

―と云う歓迎の声を聞いた。そうして涙を流した。浩さんは塹壕へ飛び込んだきり上^{あが}つて来ない。誰も浩さんを迎^{むかえ}に出たものはない。天下に浩さんの事を思っているものはこの御母さんとの御嬢さんばかりであろう。余はこの兩人の睦^{むつ}まじき様^{さま}を目撃するたびに、將軍を見た時よりも、軍曹を見た時よりも、清き涼しき涙を流す。博士は何も知らぬらしい。

青空文庫情報

底本：「夏目漱石全集2」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年10月27日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑摩書房

1971（昭和46）年4月～1972（昭和47）年1月

入力：柴田卓治

校正：LUNA CAT

2000年9月11日公開

2004年2月26日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

趣味の遺伝

夏目漱石

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>